

肩書きをはずしましょう



クルマのまち豊田に

温かい心を育んできた人たち



まえがき

クルマのまち豊田市の南西部、名鉄三河線の土橋駅と竹村駅のほぼ中間の緑に囲まれた小高い丘の上にあすてはあります。そこから東の方を見渡すと眼下に田畑や東名高速道路を見下ろし、その向こうには六所山や焙烙山などの豊田市の山並み、晴れた日には、北東方向のはるか遠くに恵那山、その向こうに中央アルプス、さらに北寄りに目をやると猿投山のはるか向こうに御岳山の雄姿を望めます。

敷地内にはボランテシア丹精の花壇があり、四季折々の花が咲き誇ります。緑豊かな樹木もボランテシアたちの手によって整備され、夏は蝉しぐれとともに、赤い実をつけるヤマモモ、常緑樹のクスノキなどの大木が木陰のオアシスをつくります。ボランテシア丹精の野菜畑にはピーマン、ナス、トマトなどが実り、ボランテシアが作る昼食の食材となって楽しませてくれます。

時にはヒナを連れて歩くキジの姿や、小道をすばしっこく横切るイタチを見かけることもあり、ほとんど昔のままの自然が残るのどかな田園風景は当時の若い勤労者たちのノスタルジアを彷彿とさせますが、街路灯一本もなかった状況に思いを馳せると、暗い

夜道にどれだけ寂しさを募らせたのだろうかと思わずにはいられません。

しかし、かけがえのない恵まれた自然は、巡りくる四季を通して人々の気持ちと和らげ、周りの自然とうまく融和したあすては、今日も訪れる人々を家族の一員のように温かく迎え入れ、思い思いの社会貢献活動に元氣と勇氣を与えてくれます。

本書は、間もなく六十周年の節目を迎えるあすてがどのようにして設立されたか、当時の人々の熱い思いがどのように受け継がれてきたか、婦人ボランティアと手を携えてどのような活動をしてきたかを史実に基づいてまとめ、三十五周年を記念して発刊されたものをダイジェスト版として再編集したものです。編集にあたっては、今までに関わられた方々には懐かしさを、ご存じない方々には親しみを感じていただけるように気を配りました。お読みいただいて当時を想像していただき、現在のあすての姿をご理解いただければありがたく存じます。

二〇二六年三月

感謝をこめて

公益財団法人あすて

理事長

豊田

彬子

第一章
憩の家生まれる





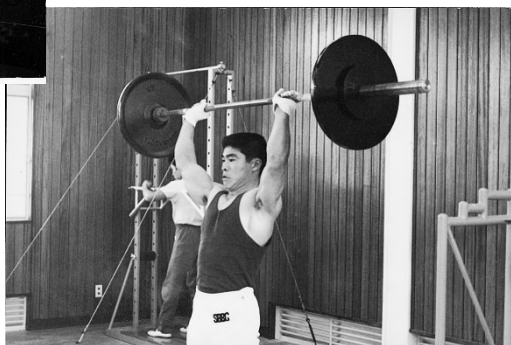
憩の家開所式でテープを切る
渡部理事長（1966年）



開所当時の憩の家（1966年）



憩の家事務室（1966年）



憩の家体育館でのボディービル（1966年）

一、時代背景

高度成長期といわれた一九六〇年代、日本のモーターリゼーションは急速な進展を遂げた。その一翼を担って、豊田市はトヨタ自動車工業ならびにその関連産業を主軸とする内陸工業地域として発展していた。一九六二年（昭和三十七年）六月に、トヨタ自動車工業の生産累計が百万台を達成、一九六五年（昭和四十年）には二百万台を記録した。同年十一月に上郷工場が、一九六七年（昭和四十二年）には高岡工場、翌一九六八年（昭和四十三年）には三好工場が次々に操業を開始した。

それまで地元の勤労者で充分足りていた工場も、次第に人手不足となり、自動車メーカーおよび部品メーカーなど自動車関連の会社は、日本全国から若い働き手を迎え入れた。企業側は人手を確保するために、次々に独身寮を建て、厚生施設を整備して、できるかぎりの受け入れ態勢を整えるのに懸命であった。会社の寮だけでは間に合わず、地元の民間アパートを借りて利用する会社もあった。仕事量が急増し、若い働き手は増える一方で、大企業でも寮を間に合わせるのに精一杯であったので、ましてや関連の中小企業などは寮の整備まで手がつかず、若い勤労者たちへのきめ細かい配慮までできにく

い状況であった。それを見かねた農家の人たちは、横家や物置を入居できるように改造するケースも多かった。

そのような環境の中にあつて、大勢の中学卒の少年たちが全国から次々に豊田市およびその周辺の地域に就職してきた。まだあどけなきの残る少年たちは、それぞれの会社の厚生施設である寮やアパート、農家の空き部屋などに入つて新しい社会人としてのスタートを切つた。会社の寮では十畳ほどの一部屋に、五、八人が集団生活を送つていた。このため集団生活になじめない者や、会社と寮の往復ばかりで、日曜の休みに気分転換できるものもなく、郷愁を駆り立てられ、身をもてあまして、一部には非行に走る者もいた。それまで豊田市では耳にしなかつた新聞沙汰となるような事件が起き、脱落する者も増えて、社会問題にまで発展していった。

こうした社会問題は、のどかな高岡の農村地帯にも例外なく押し寄せてきた。村中が一つの家族のような地域であり、見知らぬ少年たちをことのほか警戒した。例えば、畑のスイカがなくなつたとか、良くない出来事が起きると、「あの子たちじゃないか」と疑うこともあつた。しかし、村の人たちは、ふるさとを遠く離れて働きに来た少年たちと顔を合わせているうちに、徐々に身近な存在として意識するようになった。

二・ 緑風荘での劇的な出会い

高岡地区に麻の実会という読書グループがあった。一九六四年（昭和三十九年）初夏のある日の集会では、いつの間にか寮生の行動などが話題にのぼった。青少年の健全育成をスローガンに掲げ、婦人会活動を進めている自分たちが、地域社会全体を考えず、中学を出て遠い職場に来て、慣れない環境に不安な気持ちで行動するこの人たちを疎外し、傍観し、批判していてよいものだろうか。町の経済を担い、将来はこの地に家庭を持ち、ともによき隣人として、手をたずさえていく大切な人々。まして、この人たちを送り出した母親は、子の幸せを祈り、どんな気持ちで暮らしていることだろうか。同じ母親の立場に立って、今できることは、寮生の母親代わりではないだろうか。とはいっても、自分たちの家に、どういう性格の人かもわからぬまま招き入れることは不安であり、集うための適当な場所があればと話し合った。沖縄出身の国場さんは、「戦時中、疎開で竹村に来て、主人の出征、ソ連抑留と苦しい時に、この地区の人たちに温かく包まれて生活できたことを感謝し、これからは、何かの形でご恩返しをしたい。主人の停年退職も間近であり、今一番考えているのは、故郷沖縄から就職している少年のお世話が

できればと思うが、家も狭く、とても退職金で家を建てるということもできないので、悩んでいる」と話した。

そこにルーテル教会の緒方一誠牧師が講師として招かれていた。緒方牧師は、出身地の熊本で大空襲に見舞われ、焼夷弾の不発弾の処理で信管を取り除く作業中に破裂し、左腕と両眼を負傷して、二十歳の若さで両眼から光を失ったのである。一九五五年（昭和三十年）、三十歳の時に挙母市（現在の豊田市）桜町の教会へ赴任して来た。当時、トヨタ自動車はまだ本社工場だけであつたが、一九五九年（昭和三十四年）に元町工場が稼動開始する頃には、教会へも九州や東北から働きに来ていた若者たちが来るようになった。緒方牧師は教会を訪ねる青少年が、自動車をつくる夢を抱いて来たものの、明けでも暮れてもネジを締めるだけで、夢と現実の格差の大きさに失望している姿を切々と話した。婦人たちは、緒方牧師からアメリカにおけるボランティア活動の話などを聞き、この青少年の問題を実践に移して、彼らのおふくろ役として奉仕活動をしたという思いを募らせていった。それを実現させるために、小さくてもいいから、温かい家庭的な雰囲気の出せる、青少年たちとの「つどいの場」がほしいと願った。

同じくそこに同席していた酒井鈴夫県会議員は、常々婦人会の人たちの声に真剣に耳

を傾け、相談を受け入れていたが、この時も行政の立場から意見が出された。その結果、話しは大きく膨らみ、勤労青少年のための施設が必要だということになった。その場で、緒方牧師は、数カ月前から黒い革のカバンに入れて持ち歩いていた一枚の夢の施設の青写真を取りだして広げ、参考として皆に見せた。その図面に強く心を留めた酒井県議は、「これを見せたい人がいる。しばらく貸してほしい」と頼んだ。婦人たちのひたむきな願いに心を動かされた酒井県議は、当時高丘工業（現アイシン高丘）などの社長であった渡部新八氏に相談を持ち掛けた。

渡部社長は高丘工業の工場建設に際して、当時としては超進歩的なインダストリアルパークを周囲の心配をよそに建設していた。広さ二十万平方メートルを超える工場周辺の緑化や汚水処理など公害防止に万全を期して、無公害工場を目指し、世間の注目を浴びていた。鋳物工場から出る廃熱を有効利用して、熱帯温室、および草花や野菜を中心とした農作物の温室、社員が仕事の疲れをいやす風呂もあった。また、社員の福利厚生として、九ホールのミニゴルフ場が工場敷地内にあり、その一角には和風の別荘のような厚生施設「緑風荘」があり、企業トップと社員との語らいの場としても使われていた。このようにいつも人の心や自然環境を大切にしていたため、工場用地確保にあっても、

高岡の不毛の地が地域の人たちにも役立つようにとの熱い思いがあった。それを並々ならぬ尽力で実現させた酒井県議とは強い信頼関係でむすばれていたことから、緒方牧師の夢の施設の話しが持ち掛けられたのであった。

かねてから、企業経営者として真剣に若者たちの幸せのために心を寄せていた渡部社長は、一九六四年（昭和三十九年）十月、麻の実会の会員、緒方牧師、酒井県議を緑風荘に招待した。酒井県議は、彼らを案内する道すがら初対面の渡部社長について「これから会う方は、普通の社長さんとはちよつと違います。金儲けだけに走るのではなく、どうしたら自分の会社に勤めている人たちが幸せになるか。どうしたらいい仕事をして、気持ち良く人生を送ることができるか。それを常に考えておられる方です」と説明した。たどり着いた緑風荘は名のとおり、緑の木々と芝生に囲まれた和風の一軒家であった。初対面であったが、かねてより酒井県議から若者のための施設の話聞いていた渡部社長は、みんなを温かく迎え、テーブルを囲んで、婦人の立場、牧師の立場から、県外から来ている若い人たちのことについて実情、勤労青少年の課題や福祉について熱い思いを聞いた。

終始笑顔でうなずいていた渡部社長は、胸のうちを語った。「よし解った。実は私もあ

の若い連中のことが気になっていた。この緑風荘に十人ずつ新入社員を呼んで話し合つたこともある。本当に素直でよい青年たちなのに、寮に帰ると喧嘩をしたり、ガラスを割ったりする。なぜかと良く考えると、寮のなかには家庭がないことに気づいた。そこで青年たちに良いと思われるいろんなことを試みても、会社のすることはどうも信用されない。会社側の思うことが青年たちに伝わらず悩んでいる。それを担ってくれる人もいない。もし、会社と無関係のあなたたちが、そのような役割を果たしてくださいなら、こんなによいことはない。私も協力しよう」と励ましの言葉をかけた。そして、満面の笑みをたたえ、お気に入りのコーラのビンを握って皆に勧め、「これで乾杯だ、乾杯だ」と連呼して飲み干した。そして、話を続けた。「お金の問題はワシが考える。酒井さんが、県や市および地域との折衝をやる。緒方さんが、その施設に魂を入れる。それでよからう。それに地域のお母さん方が、我が子に接するような愛情をもって関わってください」と懇願した。婦人たちの願いが本物であることを確信した渡部社長は、その会談の締めくくりとして、「企業としても、一生懸命に取り組んでいるのだが限界を感じていた。不十分なところを地域のご婦人方が補ってくださいるといふのなら、そんなありがたいことはない。施設はつくるから、しっかりお願いします」と一人ひとりへ確認す

るように語った。

こうして、中学を卒業して遠く故郷を離れて働きに来ている少年たちの明るい将来を願って、温かい手を差し伸べ、「在所のような家」をつくるのだという全員の願いは堅い絆で結ばれたのである。懇談を終えて、渡部社長は目が不自由な緒方牧師の手をとって縁側に案内し、窓の外の緑に囲まれた風景などを説明した。「あなたに、ひと目見せたいな」と言ってポンと肩をたたいた。緒方牧師は胸の中が熱くなるのを覚えた。続いて渡部社長は、全員を同じ敷地内にある、自然の緑を生かして自ら設計した工場敷地内の九ホールの社員ゴルフ場、自慢の工場廃熱利用の温室などを紹介して回った。渡部氏は、緒方氏の手を支えて温室に入り、大きく実ったキュウリをちぎって手渡した。実業家渡部氏は、四国人特有の大らかで明るく大胆な中にも優しい心の持ち主であった。この出会いを契機として、各自が思い思いに描いた夢はいよいよ実現に向けて一気に進展することとなり、堰を切ったようにそれぞれが各方面の関係者へ次々に施設づくりの理解を求めて働きかけ、輪を広げていった。

三、幾多の困難を乗り越えて建設用地が決定

緑風荘での話し合いを終えて、早速、酒井県議は憩の家の建設場所を探し始めた。最初に目を留めた土地は、麻の実会の本拠地に近い高岡町の小山であり、大変良い場所であったが、豊田市全体としてみて、もう少し中心部の土橋に近く、しかも良い自然環境で、若い人たちがエネルギーを発散できるところを求め、さらにあちらこちらを探し回った。そして、一九六五年（昭和四十年）の秋、一本木朝日二〇番地に立った時、誰もがすばらしい場所だと直感した。背丈ほどもある草を掻き分け、その高台に立って見渡すと、東の方には田んぼが広がり、その間を一筋、名鉄電車が走り、はるか遠くには恵那山や御岳、中央アルプスの連山が連なっている。これこそ毎日、汗とほこりの中で働く若い人たちに最も必要なところだと胸が熱くなった。

しかし、その土地は、農家の人たちにとって、先祖の汗と涙がこめられた伝来の財産であり、今の生活もかかっている。そう簡単にそのような土地を手放してくれるはずはなかった。この土地を購入してほしいという関係者たちの期待を一身に背負って、酒井県議は地主たちと折衝を繰り返して、一人ひとりを説得して、土地を若い人たちのために

手放す決意を促した。それは並大抵の苦労ではなかった。すべての土地譲渡の手続きが完了したのは一九六五年（昭和四十年）十二月のことであった。

次に資金面でも大変な困難を極めたが、周囲の理解もあり、何とか建設資金も集めることができ、晴れて一九六六年（昭和四十一年）六月、渡部社長、小原建設社長、酒井県議によって建設用地に鍬が入れられた。

四・憩の家に魂を入れる準備をはじめ

渡部氏から「憩の家」に魂を入れるよう託された緒方氏は、早速、宮上住宅に住んでいた細川拓氏を訪ねて、勤労青少年の福祉問題について研究することにしたのである。研究は一九六五年（昭和四十年）の九月頃から約一年間続いた。集まったのは、細川拓夫妻、麦島静、寺田弘、加藤容子、前田茂子の六氏であった。テーマは、三つあり、一つ目が、豊田市における勤労青少年の実態についての調査、二つ目が、他府県における勤労青少年に対する福祉の状況、三つ目が、「憩の家」ができた時の職員としての心構え、施設の内容と行事、青少年の取り扱い等であった。

一九六六年（昭和四十一年）五月のある日、若い人から緒方氏に勤労センターで手伝

いがしたいという電話があった。「新聞で勤労センターというものが建てられることを知った。そしてボディービルが体育館に備えられると聞いたので、教育委員会に問い合わせたところ、あなたのところに尋ねてみようということであった。ボディービルは素人ではなかなか難しいが、もし指導者が必要なら僕が手伝ってもいい」という申し出であった。この時受話器を下ろした緒方氏の脳裏に浮かんだのは、ボランティアシステムであった。つまり、人が善意をもって他者のために時間と能力を捧げる、まさにこのような奉仕活動こそが勤労センター憩の家の指導概念にふさわしいことではなだろうか、そしてこのボランティアの精神が、この地方の若い人たちの心の中に植え付けられていくならば、またこうした働きが、この地方のいたるところに花を咲かせていくならば、おそらく本当に住みよい豊田市になるに違いない。こう確信したとき、緒方氏は、大きな希望の光を発見したような気持ちだった。

こうして憩の家のいわば指導理念として、ボランティア活動を中心に置くことにして、早速若い人たちに呼びかけていった。この呼びかけに応えて、ボディービル関係のリーダーとして、宇野剛さん（トヨタ自工）、植木隆之さん（トヨタ自工）、大間知健治さん（トヨタ自工）、卓球のリーダーとして平野かよ子さん（トヨタ自工）、枚平育子さん（ト

ヨタ自工)、砲丸投げのリーダーとして山田博さん、これらの人たちが、開所を前にして、奉仕活動に参加し、職員を助けた。憩の家の建物が、一日と完成に向かっているのを見ながら、幾度かルーテル教会に集まり、ボランティアとは何か、また若い人たちのリーダーとしての心構えなどについて学んだ。

また、婦人たちのボランティアについては、高岡地区婦人会は、すでに勤労青少年問題について、機会を捉えては話し合いが行われていた事情もあって、当時、指導的な立場にあった近藤きみ子さん、山田栄さん、太田敦子さん、窪田ふじゑさんなどの積極的な協力により、この地方の会員募集が続けられた。挙母地区では、婦人会長であった本田貴美子さん、ルーテル幼稚園母の会の松岡あい子さんなどを中核として家庭婦人に参加を呼びかけていった。上郷地区では、鴛鴦の渡辺さん、鶴田さん、三浦さんを中心として上郷農協婦人会でボランティアについて説明会を持ち、積極的な協力者を見出していた。

昭和四十一年九月には代表者をルーテル教会で開き、ここでもボランティアの主旨などについて説明し、積極的な協力を呼びかけた。その後も各地でボランティアを募集し、その年の十一月二十三日には、ほぼ完成に近づいていた憩の家本館の、後にサロン

と名付けられる部屋で、全体集会を持ったのである。高岡地区、拳母地区、上郷方面から集まった人たちは二百人に近かった。この第一回全体集会の中で、ボランティア精神を一人ひとりが深く心に刻み、憩の家にやってくる若い人たちのために、母親として具体的どんなことをしてあげるのかなど、奉仕活動の内容について相談が行われた。そして開所式での晴れ舞台に向けて、そのころ若い人たちの間で口ずさまれていたフォークソング「バラが咲いた」を太田敦子さんの指導で合唱練習に励んだ。回を重ねるにつれてボランティアの婦人たちは、歌詞にあるように、寂しかった僕の庭に真っ赤なバラの花を咲かせたいという夢を膨らませていった。

五・設立に向けて

一九六六年（昭和四十一年）五月二十五日午後、財団法人勤労センター憩の家の設立者会議が、豊田市役所高岡支所の応接室で三時間にわたって開催された。設立者は渡部新八、緒方一誠、酒井鈴夫、鶴生仁一郎、岩月倫太郎、三岡鑛次、鈴木元、寺田清彦、嵯峨貞二、細川拓の十氏で、全員が出席した。事前に、勤労センター憩の家設立趣意書が渡部氏より出席者に配布された。

勤労センター憩いの家設立趣意書（案）

一、目的

この法人は、働く人々に憩いの場を与え、ひいては地域社会に奉仕することを目的として、勤労センターを設立したいと願うものであります。

今日人づくりの問題がやかましく論ぜられ、そのために各方面において、いろいろな方策がたてられていることは喜ばしいことでございます。しかし、根本においては心の安定が一番大切であります。ことに豊田市およびその周辺は自動車産業を中心として、いちじるしく発展しており、工場に働く人々の人口は年毎に増加し、しかもその多くは若い方々でございます。これらの人々は他府県より流入された方が多く、一応経済的には安定して恵まれておられるけれども、心の憩いの場を必要としておられます。

そこで、この法人はこうした人々に真の平安と憩いを与え、勤労の意欲と生きる喜びを見出し、ていだきたく勤労センター憩いの家を設立したいと心から希望するものでございます。そして、この施設は次の働きを通じて豊田市およびその周辺の地域社会の文化向上のためにも一助となりたく願うものであります。

二、働き

目的のもとで、次のような働きをこの憩いの家は行います。

(一) 精神指導

(二) 教養を高めるために次のような事業をおこないます。

イ、図書設備を整え、また読書グループを通じて人格を高めていく

ロ、お茶、お花、料理、音楽などを通じて生活を豊かにしていく

ハ、英会話の指導

(三) 社交の場

若い男女のために清潔な社交の場を与え、こうした交わりを通じて共に生きる喜びを見出して行くようにし、また、はげしいオートメーションの中の働きに、うるおいを与えることによつて勤勞への意欲を更に増していくように援助します。

(四) レクリエーション

遊戯の設備を整え、また各種のレクリエーション活動を通じて、協力の精神を養いたたいとおもいます。

三、宿泊施設

地方から働きにきておられる方々に面会などがあつた時、家族そろつて語り合う宿泊の設備を整え、また地方新聞なども整え、ふるさとの消息なども知り、安心して勤務に従事できるようにしてあげたいと思ひます。

以上、多方面にわたり、できるだけの働きをなし、同時に地域社会の青年団体、その他文化団体との交流を通じて地域との結びつきを深めていきたいと思つています。

四、建設予定地

竹一本木から名古屋鉄道三河線竹村、土橋駅に徒歩各十五分 名鉄バス停あり。

五、施設は別紙青写真の通りであります。

六、この施設の円滑をはかるために運営委員会を設けます。

七、建設資金

以上の施設のためには、概算三千五百万円程度必要と思われれます。その資金は地元各企業その他から募集します。

昭和四十一年五月二十五日

この趣意書案、寄付行為については全員賛成で可決され、続いて、第三号議案「寄付

財産」について渡部氏が次のように説明した。「お手元に配布の資料のように、現在すでに現金三千万円、そのうち五百万円は基本財産として寄付を受けています。ご寄付願いました各企業には深甚なる敬意を表し感謝に堪えない次第でございます。この金は二千万円と五百万円に分けて銀行に預けてあります。では預金通帳を回しますからご覧ください」。これに対して、労をねぎらう声が出て、出席者全員が異議なく承認された。

次に第四号議案の「事業計画および収支予算について」審議が行われ 主事館はどのようなことに利用するのですか」という質問が出された。「主事館は管理人の宿舎です。管理人は優秀な人をお願いし、そこでは一般家庭の雰囲気の中で個人指導を行いたいと思います。たとえば悩みごと相談、結婚相談、あるいはカウンセリングの実際を展開する場にします」と渡部氏が説明すると、すかさず岩月氏が「実に良い構想と思います。遠く他府県より来ている寮生などにとっては思いがけない憩の家になることでしょう。私はただの管理人の宿舎だと誤解していました」と賛成の意を述べた。

役員には理事長・渡部新八、常務理事・緒方一誠、理事・酒井鈴夫、佐藤保、三宅正雄、鵜生仁一郎、岩月倫太郎、三岡鑛次、鈴木元、監事・寺田清彦、嵯峨貞二、細川拓の十二氏が選出された。その他すべての案件について全員の賛成を得て終了した。

この設立趣意書により、民法三十四条の規定に基づき一九六六年（昭和四十一年）八月三十日付けで財団法人勤労センター憩の家設立の許可申請をし、同年九月十七日付けで認可が下りた。

十一月二十八日の第二回理事会議では、第一号議案「現在までの建設関係事項および募金など」について報告があり、完成した建物の建設費の仮受け支払いと募金の継続活動の確認が行われ、物品の寄付については、出席者全員が感謝をもって受け入れる旨承認された。続いて、第二号議案「運営について」の議題に移り、緒方常務理事が議案の説明を行った。「この件に関しては、一、職員構成、二、運営の基本的な考え方、の二つの問題です。まず職員については、運営の最初の段階であり、予算等の都合もあるので、有給の職員として、管理人に国場惟貞氏と和子夫人、事務職員に加藤容子さん、無給の職員として、緒方常務、ラース・イングルスルド氏、細川拓氏、麦島静氏、寺田銀弘氏の五人を推薦します」との提案に対して、「無給の方はなかなか大変だと思えますが宜しくお願いいたします」と渡部理事長がねぎらいの言葉をかけた。「有給の職員は、健康保険、失業保険などの必要もありますので、理事長の会社でお引き受けただけであればいいのですが」と緒方常務がお願いし、渡部理事長が「いやー、それは困ったな。しかしまあ

出発当初だから、それもやむを得ないか」と答えると、全員が「よろしくお願いします」と口をそろえた。続いて運営の考え方の案が述べられた。「基本的な運営としては、ボランティアシステムを考えたいと思います。家庭婦人、体育・一般利用者、さらには企業体の奉仕を受け、それを組織立て、憩の家を中心にした奉仕活動を願うと同時に、それぞれのボランティアの中から幹事を選んで幹事会を組織して理事会で決定された運営を具体化しようというものです」「ボランティアの活動は、どこか他のところでやっていますか」「そうですね、日本ではまだ広く一般化してはいませんが、欧米諸国とくにアメリカでは盛んなようです。聞くところによると数百万人のボランティアが地域社会に活動しているようです」「たいへん面白い試みだと思います。やってみたらいかがでしょう」という会話がやりとりされ、全員が賛成した。

ボランティアの組織と活動

イ、家庭婦人によるボランティア

できるだけ多くの家庭婦人によって組織し、それらの方々の善意による奉仕活動によって勤労青少年との交流の場を数多くもち、花壇の手入れ、洗濯の奉仕、レクリエーションを共に行うなどして、里親の役割をします。そして家庭的な雰囲気をかもし出していただきます。

ロ、企業者によるボランティア

寄付をしてくださった会社の代表の方々によって組織し、勤労センター憩の家の運営が的確に行われるよう指導していただきます。

ハ、利用者によるボランティア

この施設を利用する勤労者の中から募集し、グループ活動のリーダーとして諸行事に積極的に参加し勤労センター憩の家が真に働く人々のものになるよう活動していただきます。

二、体育指導者によるボランティア

体育施設活用のため、経験豊かな方の協力をお願いし、指導と助言を求めるとにします。

次の議題に移り、開所式および記念行事について緒方常務理事より説明が行われ、和やかな雰囲気の中で開催したいと述べた。記念品についての提案があり、それに対して緒方常務理事が代案を述べた。「この施設はみんな寄付によってできるので、その金は一円でも無駄にしてはいけないと思います。そこでいわゆるお偉方に記念品を出すより、歓迎会に招く、働く人々に何かごちそうをしたらいかがでしょうか。たとえばコーヒー、おでん、うどんなど・・・」「そうだな、それはいい考えだと思う」と理事長が同意し、全員が賛成した。続いて緒方常務理事が「いよいよ運営が始まるのですが、経理担当は会社の方で今後もずっともってもらえるものでしょうか」と質問し、渡部理事長が意見を経理担当の富田氏に求めた。「いつまでもそういうわけにはいかないでしょうが、当分の間、建設会計は私の方で持ち、運用会計は憩の家でもったらどうでしょ

うか」との提案に対して、緒方常務理事が付け加えた。「そうですね、しかしそうなるとう運用会計の経理をしてくださる方が必要となります。その適任者として木場幸代さんを推薦したいと思えますがいかがですか」。これに全員が賛成した。また、施設の利用証の発行を月五十円とする旨の案内があった。

すべての議案の審議が終わったところで、緒方常務理事が切り出した。「これは常務としてのお願いです。というのは、こうした仕事は初めての経験であり、理想はありません、実際になるといろんな困難な問題にぶつかると思えます。そこで、うまくいつている時も、そうでない時も、皆さん方のあたたかい思いやりをお願いしたいのです」。すかさず渡部理事長が「それは言うまでもないことで、私たちは信頼してかからなければ何もできないのだから。要するに、一、二年の間はテストケースだと思って、急がずにやろうじゃないですか」と力強く励ました。

最後に、商工会議所会頭の三宅理事の代理として出席した水野氏が、会議出席の感想を述べた。「この会に出席して皆さんの情熱に心打たれました。今日の様子は三宅にも充分お伝えし、私としてもできるだけだけの協力をしたいと思います。どうもありがとうございます。それぞれの描いてきたボランティアの夢が、憩の家の運営開始に向けて

一つになり、お互いの熱い思いと強い信頼を確認しあった。

建物は、小高い丘の見通しのよい高台に建ち、本館の一階はサロン、食堂、事務室からなり、二階は、八畳の五つの個室、十四畳の集会室がある。本館のサロンは、激しい仕事の中での緊張と肉体の疲れを癒し、ほっとする場所としてソファアールが用意された。ステレオや図書棚なども置かれてある。食堂にはお母さん方と気楽に話せるためのあらかな配慮がされた。また、コーヒーなどを飲みながら、友達と語り合う場としての温かい心くばりもされた。二階の日本間は、寝転んでも良いし、またふるさとから家族や、友人、知人が訪ねてきた時、この部屋で語り合うことができるように工夫された。本館を出て体育館へ行くと、当時では珍しいボディービルの器具が並んで若者たちを待っている。ボディービルが中心に置かれたのは、当時の労働条件の中で、心身の健全な発達を促すのに最適の方法だと考えられていたからである。主事館は、若い人たちのよき相談相手になる主事の住宅として考えられていた。完成した建物は「麻の実会」で話しが持ち上がったころに婦人たちが描いていた小さな家ではなく、立派なものとなった。

六・運営が開始される

憩の家の入り口には『ここは憩の家です。肩書きをはずしましょう』と書かれた看板が掲げてあり、訪れた人々の注目を浴びた。「人が憩うのは肩書きを外し、一人の人間として、全ての人が同じ立場で話し合う家である」と言う意味で、その趣旨は、この施設を訪ねる人々が、儀礼的な装いをすべて取り去って自由に交わろうという想いである。十二月十一日からの三日間にわたって行われた開所式には約二〇〇〇人が参加して祝い、いよいよ憩の家がスタートした。和やかな開所式が終わって若い人たちが三々五々それぞれの会社の寮へ帰っていった後、憩の家の初代の会計役になるように勧められた木場幸代さんに、運営費といって手渡されたのが十万円であった。それは一カ月の経費をも満たすことのできない金額であった。木場幸代さんは、当時の苦労を次のように語った。

酒井先生から『会計をやれ、経験がなければ教える。家計簿をつけていれば大丈夫』と言われ、憩の家の歩みの方向が決まるまでという約束で会計という役割をいただき、十万円と書き込まれた帳簿と現金を受け取りました。甘えてはおりません。ボランティア母さんの真剣な知識と働きで、お金を使わなくてもできるよう努力しました。一杯のお茶にも真心を込めて、施

設を訪れる人々に接しました。『二万円以上のものがある場合は、会社に言つてきなさい』と言われました。初めに洗濯機と冷蔵庫を買っていただきました。小さな補修は、管理人の国場さんが工夫をして修理しました。また当時、憩の家の周辺は真つ暗でした。街灯の一つもない道を、皆さんは竹村の駅から歩いてこられます。そこで本町の方たちの協力で、竹の先端に裸電球をつけたものを設置してもらいました。また、宣教師のラース先生は、暑くなれば扇風機、寒くなればストーブをアメリカの施設からもらい受けたり、ぼんこつ屋さんと仲良しになり、電化製品や車などを直し、寄贈してくださいました。本当に当時はお金がありませんでした。

渡部理事長さんは、短い時間でしたが、よく立ち寄つてにこやかな顔を見せてくださいました。何の指示もなさらず、ただ私どもの話に耳を傾けてくださいました。「冷蔵庫の大きなものがほしい。繕い物をするのにミシンが：外灯があれば芝生の庭が活用できますので：とか、次々に出す要望を買っていただき、憩の家の運営費にするため、会社まわりをし、施設の内容を

訴え、協力をお願いしました。目が不自由な緒方先生は、あまり協力的でない相手の話し方などから、その方の顔が想像できるとおっしゃっていました。本当に辛く、涙がでました。企業に依頼に行つて出るお茶からも、相手の心が感じられました。出がらしのお茶が出る所もあれば、ご苦労様とお茶を下さる所もありました。青少年のために使うお金だと理解を求めましたが、それでも辛かったです。どの会社も急成長の自動車産業の発展に伴う自社の設備投資や、全国をまわつての従業員の確保、寮の建設と、福祉どころでなく、かえつて憩の家での交流によつて、大切な従業員を他社に引き抜かれるのではという不安があり、理解どころか、硬い表情の応接が多い状態でした。あらためて、建設資金作りに奔走された、理事長さんはじめ周囲の方々のご苦労が身にしみて分かりました。

第二章 憩の家を支えたボランティアのあたたかい手





憩の家の食堂で料理をする
ボランティア



サロンでギターを楽しむ
若者たち



第3回ひなまつり



新入社員歓迎会

一、「豊田家庭婦人ボランティア」組織の誕生

地元の婦人グループ活動から生まれたこの施設が、活かされるかどうかは、婦人たちの、純粹な母親としての願いからなる奉仕活動にかかっていた。それは「勤労センター憩の家」の開所と同時にふくろ役としてスタートし、積極的に展開していった。

活動は、昼の部と夜の部に分けられ、一カ月の中で全会員が担当日を決め、昼の部は午前十時から午後二時頃までの四時間、憩の家の屋内と外周りの清掃、洗濯、宿泊者の寝具の整備、繕い物、草取り、台所仕事など、家庭の昼間の家事と同じことをする。夜の部は、午後七時から九時までの二時間。一日の勤めを終え、憩の家へ集まる若い勤労青少年を迎えて、お茶の接待をしながら話しあったり、一緒にゲームやフォークダンスに興じたり、希望者には簡単な軽食を作ったり、繕い物をしたり、また若い人たちの自主的な集いを温かく見守りながら、顔色のさえない人を見ると、心配になって問いかけたり、励ましたり、ちよūd家庭におけるおふくろ役をする。

職員も一丸となって、わずかな体験を手がかりに精一杯働いた。ボランティアはこうした職員を慰め、励ました。そんな中でいよいよボランティアの組織作りをしようとい

う動きが出てきた。

ある夜、憩の家に豊田寿子さんが訪ねてきて、「渡部理事長、酒井県議から憩の家の今日にいたるまでの経過、理想などを伺っていました。とくにボランティア活動は私の思いですから、積極的にかかわっていきたいですね。それは今日の日本社会の大切な課題です」とボランティアへの熱い思いを語った。これに感銘を受けた緒方常務理事が「とてもあつかましいお願いですが、ボランティアの会長になっていただきたい」と懇願したところ、豊田寿子さんの内諾が得られた。

そして一九六七年（昭和四十二年）四月、『豊田家庭婦人ボランティア』組織が正式に発足し、会長に豊田寿子さん、副会長に木場幸代さんが選出された。各地域から代表者を選び、幹事として会を支えた。ところが、五、六月の農繁期に差し掛かると、農家の主婦は、たとえばのようにボランティアに対する強い意志をもっていても、猫の手も借りたいほどで、その中での奉仕活動は到底無理であった。そこで今度は、それまであまり交流のなかった企業の社宅方面へ目をむけ、トヨタ生活共同組合の家庭会に働きかけた。この人材確保の動きが家庭婦人に広くボランティア活動への理解を深める良い機会となった。そして農繁期を過ぎても心に留めた人たちが次々に入会し、全会員は四百人

近くに増え、年間を通してのボランティアの人材を確保できることとなった。会員はほとんど豊田市全域に広がって、生活環境も年齢も違ういろいろな層の家庭婦人たちの集まりは、お互いを知り合い、豊田市という地域に対する連帯感を育むという予想外の良い結果をもたらした。こうして婦人ボランティアは憩の家を中心にして県外からやってくる若者たちと、地域社会とのつなぎ役となっていくた。会員同士は互いに切磋琢磨し、学びながら実践することを繰り返した。また、組織的計画的に展開される活動の中で自分たちの役割を認識し、若者が喜ぶ姿に生きがいを見出した。富田佳子さんは青年たちとのふれあいを通して次のような文章を寄せている。

つい先日も、二人連れの青年が、ふらりとやって来ましたので、また夜勤かなと思いをかけてみると、「会社をやめようと思うが、その前に憩の家というところへ一度行って見たいと思ってきました」と言われ、その場に居合わせたボランティアのお母さん方と一緒に輪になって話し合いましたところ、「仕事の面でも面白くないが、それよりも僕たちの話は、何によらず聞いてもらえないので淋しく、張り合いもない。もう故郷へ帰って仕事を探し、のん気に暮らしたほうが良いと思って決心を固めたけれど、僕の話をごんなにも一生懸命に聞いてもらえる人たちや場所があつてうれしい。会社を辞めようと思ったが、もう一度よく考えてみよう」などと言っていました。帰り際の青年の顔は誠に晴々として「また遊びにきます」と元気に帰って行かれました。

利用者の多くは全国各地から集団就職してきた若者で、北は北海道から南は沖縄まで全国の出身者で占められていた。その利用方法は、毎日利用する人、毎週定期的に利用する人、宿泊するために利用する人などさまざまであった。開所から一年間で、利用証は四千九百六十五部が発行され、延べ二万人を超える人たちが憩の家を利用した。そのうち宿泊したのは九百七十一人で、団体での利用は二千四百九十人であった。ボランティアの登録者は四百十五人を数えた。その内訳は家庭婦人が三百九十九人、スポーツ関係が十六人であった。また、数多くのいろいろな行事が開催された。主な行事としては、年末年始に帰郷しない若者を対象に行われた十二月二十九日の餅つき会、一月二日の力自慢、カルタ会、三日のピンポン、将棋大会、四日はフォークダンス、かくし芸大会が開かれた。一月十五日には「三代青年の集い」として明治、大正、昭和の青年百二十六人を招待した。二月三日の節分には豆まきを行なった。当時は男女が交流することはいろいろと問題視されていたため、当初の利用者は男性ばかりであったが、女子寮に話をして、三月三日には若い女性が参加してひな祭りが実現した。白酒やあらねなどを準備し、ボランティアのおかあさんたちもちらし寿司を作った。二月から五月にかけては、各社毎に歓迎会が行われた。

憩の家は豊田の市街地からは遠く、バスを利用する場合は、一本木の停留所から十分近くかかり、名鉄三河線の竹村駅からは十五分以上かかった。せつかく施設はできたが、青少年たちも、ボランティアたちも憩の家に行きたくても不便な事が足かせになる状況で、利用者が固定化されつつあった。それを見かねて、ラース・イングルスルード宣教師は、昼はボランティアのために、夜は勤労青少年のために自動車での送迎を買って出た。いつも「私はなすべきことをしているだけです」と笑顔で語り、自から進んで奉仕をする姿勢に、みんなはボランティアのあり方を見た思いがしたが、頼ってばかりはいられず、それを解決するために送迎バスを何とかしようと言合った。

しかし、購入する資金がないので、ボランティアたちは、一九六七年（昭和四十二年）十月二十九日にマイクロバス購入のための第一回憩の家文化祭バザーを開いた。味バザー、手芸品の製作・販売なども行い、五平餅の屋台まで借りて、全員が協力し合った。ある人はお米を、ある人は野菜を、ある人は手芸品の材料を快く持ち寄りみんなで手作りした。こうして得た純益五十数万円に、豊栄地区のボランティアは中日クリーナー従業員の温かい配慮で、毎日交代で寮の掃除を担当して得た賃金を寄付し、さらにトヨタ自動車工業、アイシン精機の援助が得られた。荒川車体は、皆が頑張っている様子を聞い

て不足分を補うなど、多くの人の善意に支えられてマイクロバス購入が実現したのである。そして、開館一周年の一九六七年（昭和四十二年）十二月十一日、マイクロバス贈呈式が憩の家のサロンで開かれ、ボランティアからキーが贈られ、運行が開始された。これが「つばさ号」の一号車である。つばさ号は、ボランティアのお母さんや利用者を乗せて、憩の家を起点に企業の各寮、および会社を巡回し、大活躍した。

その後、一九七四年（昭和四十九年）十二月には、婦人ボランティアの送迎に、ブル―のハイエース・ワゴンが新調された。これは同年の夏、豊田家庭婦人ボランティアの日頃の活動に深い理解のある豊田金属（現トヨキン）の鈴木劔次郎氏から「ボランティアで使ってください」と多額の寄付があり、この好意を有効に使おうと、かなり傷みが激しくなってきたマイクロバスを新調することになったのである。しかしボランティアで車を持つことは維持費もかかり、管理が難しいことから、「豊田婦人ボランティア」と側面に白く書かれたワゴン車は、憩の家に贈られ活用された。

二、運営委員会の発足

憩の家文化祭が終わって一週間ほどたったある日、ボランティアをしている夫人を迎えに立ち寄った権田邦次氏は、その時から憩の家や婦人たちのボランティア活動に大変興味を示し、いろいろと話を聞いた。会計を任されている木場さんから、利用者の会費と渡部氏のポケットマネーでやりくりしている様子を聞いて、権田氏は何とかしなくてはと思いついた。当時協豊製作所の専務であった権田氏は、婦人ボランティアたちが一生懸命になって、若い人たちの未来を築くために努力しているのに、豊田市鉄工会として、あまり関わりをもっていなかったことを詫び、鉄工会としてもそれぞれの企業で働く若者たちが、憩の家に来て楽しく過ごしているので、今後憩の家の事業費を分担して支えていきたいと申し出た。

ちようど一周年記念の、一九六七年（昭和四十二年）十二月十一日に各企業の、代表者との懇談会が開かれ、その席上、豊田寿子会長から「憩の家は今まで母子家庭でしたが、今日からは立派なお父さんができました。力強く働いて、毎月憩の家へ運営費を渡してください頼もしいお父さんたちです。ありがとうございます」と感謝の言葉が述べ

られた。賛助会社の支援の始まりである。これは憩の家にとって心強い支えとなったのである。

そして、賛助会員となり寄付を申し出たトヨタ自動車工業、アイシン精機、高丘工業、大豊工業、荒川車体、トヨタ生協、協豊製作所、豊田鉄工、高島屋日発、小島プレス、新明工業、三栄工業、碧南工業、鬼頭工業、共和、三光、近藤工業、加茂蚕糸および豊田市鉄工会の十九社の代表者の構成により、「運営委員会」が発足し、第一回の会合が昭和四十三年三月に開かれた。この委員会は、憩の家と各企業を結びつけるもので、理事会と利用者との中間的な位置を占めるものである。

憩の家が働く人々の憩の場となり、温かい人間関係の中で、できるだけ多くの人々の利用するところとなって、設立の目的を十分に果たしたいという思いから生まれた。憩の家の事業内容の報告を受け、いろいろな方法を考え、それぞれの立場から意見やアドバイスをして、この施設が働く若い人たちのオアシスとなるよう、毎月一回定例会が開かれた。そればかりでなく会社同士の交流の格好の場ともなっていたようにも思われる。

三、婦人ボランテニアの活動が軌道に乗る

婦人ボランテニアたちは毎日の決まった働きの他に、憩の家の特別行事のある時は、できるだけの応援をした。たとえばハイキングの時、昼食は温かいものを若い人たちに食べさせてあげたいということで、人里離れた山の中で炊き出しをして、湯気の立つ五目飯を作ったり、球技大会の時のしつかり握られたおにぎりやほかほかの豚汁も、おいしそうに食べる若い人たちの姿を頭に描きながら朝早くから張り切って働くボランテニア母さんの熱い思いの表れであった。会員が、それぞれの特長を生かし、持っている能力をできるだけ發揮しよう、すすんで何でも役に立とうというボランテニア活動の本質に添って進められた。料理の得意な会員、手芸の好きな会員、和裁、お茶、お花のできる会員それぞれが憩の家に潤いをもたらした。

また、一九六八年（昭和四十三年）九月からは、憩の家へ出かけてくることのできな
い寮生たちのために男子寮訪問が始まった。寮を訪問して、繕い物をしながら若い寮生
と話し合ったりした。そのうちの一つ、丸和電子男子寮訪問の様子を村井志津江さんは
次のように記している。

ここでは寮長さんをはじめ寮母さん、寮生の方たちが私たちの訪問を楽しみにして待っていてくださいます。ミシンのまわりに椅子を運んできて順番を待つ少年たち、手に手に作業服や上着、カッターシャツを持っている。「おばさん、ここんとこ破れちゃって」「これ破れたんじゃない。ほころびよ」「あら、これ洗ってないのね。今度から洗っておいてね」というと、「この次から、ちゃんと洗っておきます」「ああこれで明日から大手を振って歩けるなあ。今まで手で押さえて歩いてたんだ。これで一、二年着れるぞ」と喜んでくれる。そういえば肘のぬけたのにパンソウコウを貼ってあるし、ほころびはやつと繋ぎ止めてあるといったようにさまざまでした。太い糸で細かく返し縫いしたカフス。「これ縫うのに日曜日一日中かかったんだ。ミシンだと早くていいね」「でもこれ、ずいぶん上手に縫ってあるわ。感心しちゃった」と言う、「そうかなあ」と少々照れている。時間が駆け足で過ぎていく。「もう時間ですから：。きりがありませんので、これくらいにしてください」と寮母さんと寮長さんが気を遣われるが、まだまだ残っている。一枚でも多く一人でも多く縫ってあげたいと思う。七時過ぎから十時近くまでの間、故郷の話、両親の話などに花を咲かせました。この人たちがしみじみ言ったことは、「おふくろっていいな」ということでした。充実した心温まるひとときでした。

このような、各企業の男子寮への奉仕活動はお母さんたちによって定期的に地道に続けられた。少年たちにとって来訪するお母さんたちの存在は、なくてはならないものになっていった。訪問先の一つである堀江金属清和寮自治会一同からは、憩の家のお母さんたちに感謝の意味をこめて、毎年、母の日に次のような電報が届けられた。

『ボランティアノオカアサンガタ ハハノヒオメデトウゴザイマス イツマデモオゲンキデ ゴ
シドウクダサイ』

また、一九六八年（昭和四十三年）九月、家庭婦人ボランティアの相互の交流を深めようと、「家庭婦人ボランティア通信」創刊号が発行された。B5版の手書きのガリ版刷りで十頁ほどの手づくりの機関誌である。名前は第一号で公募され、『むすび』に決まった。このむすびは会員同士手と手をしっかりと結び、ひいてはその結んだ手を大きく広げて世界にまでもという雄大な希望が込められ、ボランティアの心のよりどころとなり、毎回の発行を楽しみにした。各号の表紙には豊田会長の版画とあたたかいメッセージが添えられた。創刊号の冒頭で豊田会長は次のように記した。

（前略）肥えたお母さん、やせたお母さん、背の高いお母さん、笑い上戸のお母さん、活動家のお母さん、お洗濯の好きなお母さん、お料理の上手なお母さん、おっとりしたお母さん、良く気のつくお母さん、実に沢山のバラエティーに富んだ、しかしみんな親切な温かいお母さんがこの憩いには揃っています。このお母さん方が手を結んで、若い人たちのために、祖先から受け継いだ良い伝統を伝え導きながら、また私どもお母さんたちも共に社会の進歩に遅れないよう、人間的に成長できるよう互いに励まし合いながら勉強し、努力したいものでございます。これが単に憩いの家のた

めばかりでなく、良い地域社会をつくる役にも立ち、その上この波が日本中に広がって健全な住みよい社会になるためにお役に立てたらと大きな希望を持ちつつ毎日の勤めに励みたいと思います。また、緒方常務理事は次のように記した。

（前略）ボランティアつまり奉仕活動は、その根をどこにおろしているかといえ、一つは一人ひとりが生かされているという感謝と喜びの気持ちの中におろしています。自分の家のこと、自分のためだけにいくら努力しても、それは奉仕とはいえません。自分を越えて他者のために生きるのが奉仕です。また、ボランティア活動は強制されて行うものではありません。次に報酬を期待しない。これは金銭的な問題ですが、それ以上に精神的には喜びがあります。この喜びは、奉仕したことのある人だけが知る喜びであります。（後略）

憩の家のシンボルマークもこの時制定された。デザインは、トヨタ自動車工業のデザイン課にお願いした。白色のV字型の中に結び目がグリーンで描かれている。外枠はVolunteerのVをとって、ボランティアの精神を表わし、結び目はみんなの心と心、手と手をしっかりと結び歩むことを表わしている。互いに結び合い、良い人間関係において明るい地域社会の開発に努力しようという意味である。

一九六九年（昭和四十四年）十月には、憩の家の敷地内にある主事館に隣接して「かあさんの家」が完成した。かねてより、トヨタ生協は家庭婦人ボランティアに協力的であり、物心両面での支援を重ねていたが、ボランティアが更により良い活動ができるようにと、この「かあさんの家」が寄贈されたのである。この家はそれまでトヨタ生協本部内にモデルハウスとしてたてられたもので、そのまま移築され、補強・改装が行われた。併せて家の周りには庭木が植えられ、環境の良い立派な施設の誕生となった。これに賛同した協豊製作所と新明工業はじめ、その他からの多大な寄付によって、かあさんの家の家具調度品が整えられた。また、憩の家に隣接した企業の空き地を借りて、四季の野菜を作り、ボランティアのお母さんたちは、利用者の食膳や特別行事の炊き出しなどの食材に利用した。無農薬、有機栽培の新鮮な野菜は、心のこもったお母さんたちのおふくろの味を一層引き立て、若者の旺盛な食欲を満たした。

その後かあさんの家は三十五年を経て老朽化のため取り壊されたが、野菜畑は新たなボランティアによって引き継がれ、現在もあすてらんちの食材として重宝されている。

四・カウンセリングスクールの開講

ボランティアの婦人たちは青少年たちと接していく中で、真の理解者となるためにはその接し方を勉強していく必要性を感じるようになった。ちょうどその時、憩の家を見学に訪れた労働省愛知婦人少年室長の坂本氏は、勤労青少年のおふくろ役をしているボランティアの姿をみて、カウンセリングの必要性をアドバイスし、大阪十三のカウンセリングセンターを紹介した。早速ボランティアたち数名で見学に行くと、そこでは河合教授はじめ立派な教授陣が名を連ね、老若男女あらゆる人々が一緒になって勉強していることに感銘を受けた。しかし、大阪へ通うことはとても無理なことなので、豊田市にくるうという話になったが、それは並大抵のことではなく、権田氏のおかげで、企業の協力出資により、陣中町にある職業訓練所内に一九七一年ようやく開講の運びとなった。

勤労青少年たちは、職場での人間関係で悩むことが最も多いということがわかり、会社の班長さんたちにも声をかけ、地域の数多くの人々が勉強できるようになった。ボランティアも一緒に勉強したが、会社の帰りに来る人たちのためにサツマイモをふかしたり、おむすびを握って持っていったりもした。講師の全国青少年育成会会長の谷野せつ

先生は、とても親しみやすく次のように話された。

『この社会というものは、お互いのつながりでもっており、自分一人だけで暮らし通すわけにはいかないものであり、そのためには町全体がよくならなければ、自分の生活もよくならない。そして、社会の悪化、住みにくいことを政治が良くないからと片付けるが、政治行政面にも限界があり、やはり地域を構成する各自が、政治の欠ける部分を、自発的に自分たちが社会を良くするのだと善意に溺れたボランティア活動が必要である。外国の例をみても、文化的水準の高い地域ほどボランティア活動が盛んのように思われる。では、私どものボランティア活動として、例えば身近なところで、老人とか勤労青少年に目を向けて見ましよう。老人のことを外国では（経験を積んだ人）といって大事にいたわり、日本では老人というとへ何にもできなくなつた人）と感じる。しかし日本にも最近立派な施設をもつた老人ホームができてはいるが、ホームを良くするには、やはり愛情が必要である。具体的には、サービス、慰める気持ちがないとてはならない。つまり、私どもの善意が必要になってくる。また、最近の若者は、自己のみ主張し、他人の意見を聞かない。インスタントにできている。そのくせ、他人から声をかけてほしい、自分の悩みを話せる人がほしいと、一人で悩んでいるのが現状である。ですから青年と話し合う施設とともに本人と利害関係のない第三者で相談相手になれる人が必要である。次代を担う若人たちの余暇を正しく指導してやり、自分でコツコツとやってみて、楽しく夢中になれるように仕向け、本人の未開発の能力を見つけ将来の可能性を満たすことのお手伝いができるように勉強しなければならぬ。今の日本は家庭をおろそかにしている。立派な青少年を社会に送り出すためにも、もう少しお互いの家庭を大切にし、婦人としての特性を生かして、無報酬で社会を良くすることに努力してほしい。人の善意によるボランティア活動が良く育っていかないと、どんな立派な社会施設ができて、生きてこない』

五・新館の増築

憩の家のボランテイア活動がスタートしてから数年経つと、徐々に全国の注目を浴びるようになってきた。また、このころから企業では週休二日制に移行し始めていたが、時代の要求に呼応する集会、研修、室内体育、創作などの場所がなく、増築する必要性が出てきた。

新館の説計にあたっては、やはり一軒の「家」であるということから出発した。事業内容を取り上げても、いこう・つどう・かたらう・まなぶ・つくる・きたえるなどの家庭的な要素を多分にもっている。また、憩の家へ訪れる人々をみると、婦人ボランテイア（母親）をはじめ、青年ボランテイア（兄弟）、グループ（友達）そして理事や講師（父親）などの構成は、まさしく家庭であると考ええる。これらを基礎として専門委員の方々が一年半にわたり、さまざまな角度から協議を積み重ねて設計図はできあがった。

規模は、従来の施設に対して、敷地面積が一万四千八百二十平方メートルで約一・八倍。建築面積が千六百四十一平方メートル、延床面積二千二百五十一平方メートルともに約三倍となった。従来の施設と芝生広場をはさんで向かい合うような形で建設された。また立地環境の面

でも、周囲の恵まれた景色の眺望と建物の調和も重視し、南側からみると三階、北側からみると二階建てのスマートな造りとなった。

この建物の特徴は、全体が大広間となっており、「いこい」の場、「かたらい」の場、「つどい」の場、の大きく三つの広間にわかれ、それぞれの広間は個性をもった色彩のじゆうたんが敷かれ、ゆるやかな階段でつながっている。悩みごとの相談には、専門の先生が応じる相談室もある。そのほか、グループ活動、クラブ活動、学習会、会議、料理などに使える各部屋があり、工作室も二部屋ある。駐車場の整地については、資金不足のため、利用者たちが古新聞を集め、換金してU字溝を調達し、自分たちでつくった。

新館の増築にともない、設立時の施設は一部改装され、名前も「別館」と改称され、主として宿泊研修用として使われることになった。食堂は、宿泊利用やグループ利用で食事ができ、厨房では、自分たちで料理がつけられる。従来の事務所が取り除かれ、より広く明るくなった。主室の二部屋も改装して茶道用の炉が二つ設けられ、グループでも練習できる茶道教室となった。

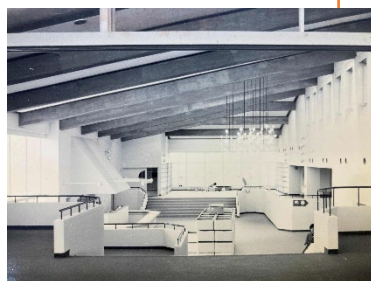
地域全体を少しでも良くしようと、勤労青少年を対象に始めた憩の家は、一九七四年七月の新館完成により、益々利用しやすい施設となり、さらに活発な活動が展開された。

憩の家
全景

新本館



別館



新本館内部

西から見る全景



第三章 青年ボランティアの活動





フェスティバル



チャレンジアジア



県人会大会



ウォークラリー&オリエンテーリング

一・青年たちの自主的な活動

憩の家がオープンしてから、二、三年すると青年たちは自主的に活動するようになり、その活動の範囲は広がりをもせていった。バスハイク、ウォーキングラリー、海水浴、自然歩道ハイクなどの行事も青年たちが中心となつて企画した。中でもウォーク・ラリーは、一九六九年三月に始まり、後にオリエンテーリング、春うららと名称を変えて、一九九八年まで続けられ、憩の家の主行事として、多くの参加者を得た。外に出かける行事に欠かせない昼食の味ご飯の炊き出しは婦人ボランティアが担当した。いつもお母さんたちが心を込めてたくさんの弁当を作り、時には大きなはそり（釜）を使って、千人分を作ることもあった。そのおふくろの味はなかなかの人氣で、若者たちの旺盛な食欲を満たした。

青年たちは各種行事をリーダー会としての奉仕活動で行うことにより、ボランティア精神を育んできた。そして、「豊田青年ボランティア」が仲間三十五人によつて一九七一年六月一日に発足した。これは憩の家だけにとどまらず、地域社会に活動の場を求め、一人でも多くの仲間に広げていきたいという願いが込められた。

その目的は、第一に地域社会への奉仕活動、第二に、青少年相互の親睦であった。豊田青年ボランティアの活動は、憩の家での活動に加えて、対外的な活動が活発に行われた。外部での最初の活動として、一九七一年（昭和四十六年）七月に三好学園活動がスタートし、以後、定期的に毎月一回活動した。その他、高岡地区体育会への参加などを行った。一九七二年（昭和四十七年）には、小原村「あざみの会との交流会」、JC主催「札幌青年との交流会」、第一回子ども会大会などを開催。一九七三年（昭和四十八年）には、親子劇場の手伝い、第二回、第三回の子ども会大会などを開催。一九七四年（昭和四十九年）には日曜保育の集いが若宮分館でスタートし、毎月二回活動が継続された。

二．チャレンジ・アジアのはじまり

青年たちに国際感覚を身につけてほしいという二代目青山常務理事の提唱で一九七六年（昭和五十一年）に憩の家で国際交流会が始まった。ラース・イングルスルード先生と山本雅子さんが国際研修センター、オイスカ研修センター、留学生会館などを回って説明し参加を要請した。ボランティアの手作りの料理でもてなし、青年たちみんなまでフオークダンスを楽しんだりして交流した。食事のメニューは宗教上の理由でいけないも

のがあり、お料理一つひとつに材料の絵をつけて一見してわかるように工夫したり、青年や婦人ボランティアたちは、言葉が通じないながらも心を通わせることができるようになっていった。このようにして青年たちは外国をだんだん身近なものに感じるようになった。

一九八四年（昭和五十九年）には中曽根首相の提唱で「二十一世紀青年のための友情計画」がはじまり、国際協力事業団からの委託事業として、婦人ボランティアと一緒に交流会やホームステイを受けることになった。はじめの五年間はインドネシアであった。こうしたことから青年たちはインドネシアを身近な親しみのもてる国と感じ、第一回の海外研修先に選んだ。これがチャレンジ・アジアの始まりである。ホームステイを中心に、身近なアジアの人々との交流を通して風土や文化に触れ、友情を育むとともに、広い視野をもつことが、そのねらいであった。

一九八八年（昭和六十三年）三月六日、募集できまった参加者五人（二十歳から二十九歳までの男性）はインドネシア・グループをつくり、事前・事後研修を通して、各自が役割を分担し、毎週水曜日の夜にミーティングを開いて、事務局を含めた参加者六人全員で考え、進めた。事前準備のため、五回の宿泊研修を含めて三十数回の打ち合わせ

会の中で、インドネシアの参考書を集めたり、インドネシア語を習ったり、関連の知識も習得した。また、新しい発見や出会い、手作りの企画にもチャレンジした。八月十日から十八日までの八泊九日の現地での主な研修プログラムは、ホームステイ先の人たちとの交流を主眼として、青年スポーツ省の大臣補佐官への表敬訪問、二十一世紀のための友情計画現地プログラムの討論会などへの参加など盛りだくさん用意され、参加者たちはたくさんの有意義な体験をした。ホームステイを通して、現地の人々の生き方や考え方を、目で見、肌でふれて、実りあるものとなった。この研修が成功裏に終了できたのは、国際協力事業団および勤労厚生協会の支援、豊田婦人ボランティアのバックアップ、憩の家の先輩青年たちの長年にわたる活動があったことも忘れてはいけない。

その後、ヨコタ博物館の横田正臣館長との出会いにより研修先をタイとした。横田館長は、前年にチェンマイ県の山の中学校を訪れた時、そこには寄宿舎がないため勉教ができない子供が多くいることを知り、帰国後、博物館を訪れた人たちにその話をした。たまたまその話を聞いた憩の家の職員は大変感銘を受け、早速第二回のチャレンジ・アジアの目的を、第一回目のインドネシアでのホームステイ中心から、さらに進んだ企画として、舞台をタイに移し、学生寮建設ということにした。これは、単に建設の援助だ

けでなく、日本から参加した青年とタイの中学生や先生そして村人たちがともに汗を流し、ひとつの建物を建設するところに最大の意味があつた。早速一九八九年（平成元年）十二月、候補地としてのピサヌローク県ナコン・タイ郡のナコン・バンヤン・ピッタヤコム中学校を視察することになった。ラオスとの国境に近いナコン・タイまではバンコクから北へ四百五十キロある。タイ航空の国内線でバンコク、ピサヌローク間が四十分、ピサヌロークからナコン・タイまでが八十キロ。この中学は生徒が九十六人、教師九人、学校はまだ正式の認可が下りていないが、教師は政府が派遣した公務員であつた。学校の敷地は広々とした草原の一角にある。一棟三教室のメインの校舎、実習棟、食堂、先生の宿舎、生徒の宿舎、にわとり小屋が集まっている。生徒の宿舎は二棟で、男女七人ずつが利用している。内部は二部屋に分かれている。壁は木の葉を竹の栈で支え、床も竹を割って敷き詰めてある。屋根はトタン葺きで窓に戸はない。食堂では当番の生徒が食事の準備をする。質素な施設であるが、生徒たちの表情は明るく、目は澄んでいる。新しく建てる寄宿舎は七メートル、九メートルの平屋建ての二棟で、五十三人を収容する計画であつた。このため現地の人たちは、「近くに泊まれるので着替えだけ持参すれば良い」と、日本からのボランティアの若者の派遣を大歓迎した。しかし、ジエトロ

(JETRO 日本貿易振興会)のタイ人の職員であるサマック氏は心配した。予定時期の八月は雨季でもあり、短期間でどれくらいのことができるかという問題に加えて、日本人と接する機会のない現地の人たちと、どうしたら気持ちを通じ合えるのか。サマック氏は、当時の日本の若者の行動や思考を知るにつけて、宿舎建設の手伝いに併せて、現地の人たちや生徒との交流を大切にしてほしいと願った。この調査は、現地の実情を知り、ボランティアに対する現地の人たちの強い要請を確認できるなど、海外派遣への実現に向けての有意義なものとなった。

その年募集により集まった十人の青年たちは事前研修として三回の宿泊研修を含む二十四回の会合を開いて八月十日いよいよ現地に臨んだ。八泊九日の活動は短期間であったが、タイの人々の思いやりと優しさに包まれ、心が通い合った。青年たちと生徒との最後の別れのときは、汗と涙が入り混じった感動のセレモニーとなった。このとき建てた寄宿舎は現在使われていないが、記念としてきちんと残されていて、現地の人たちの胸の中にはその思い出がはっきりと刻まれている。

チャレンジアジアの成功の陰には、多くの人たちの協力と支援があった。準備の段階からは、ジェトロの愛知県バンコク駐在事務所のお世話があり、特にタイ・トヨタは会

社を挙げての協力を惜しまなかった。これらの方々にお世話になりながら、一九九九年（平成十一年）の第十三回まで十二年間続いたが、参加費は自己負担であり、その事業の特徴は、参加した青年たち自身の自主的な運営によるボランティア活動にある。タイについての知識もなく初対面の青年たちが、出発までの四、五ヶ月間の事前研修を重ねることによってまだ見ぬタイの子どもたちに思いを馳せて自分たちで活動計画を作り上げ、すっかり仲間となる。校舎建設資金は、数多くの個人・企業・団体から集めた物品に参加する青年たちが中心となってバザーで販売し、その売上金を充てる。現地ではタイの中学生や先生、村人たちと汗を流し一つの建物を建設する。この貴重な体験を通じて、言葉を越えたコミュニケーションでお互いを理解し、心が通い合う。そこで生まれた悩みや疑問の中で、タイという国を通して日本を考える。子どもたちの純真な笑顔に、本当の豊かさは何かを考えさせられる。この心の触れ合いによって青年たちはいくつもの大きな感動を得る。こうした感動の積み重ねが青年たちの豊かな心をはぐくみ、さらに国際人としての素養を身につけていくための一助となったのである。

第四章
地域と共に歩むボランティア





春うらら 炊き出し



東郷老人ホームでの
お花見のお手伝い



20周年の年表作り



サロンドムスビの開始にあたって
ネームプレートを掲げる豊田寿子会長

一、婦人ボランティアの活動が地域へ広がる

婦人ボランティアたちは、親元を離れて働きに来ている青少年たちが立派に成長することを願って活動が続けてきたが、昼の部は殆ど勤労青少年に接する機会がなく、掃除や洗濯で終わってしまうので、理屈ではわかかっていても、感激のないまま情熱も失われていくように思われた。夜の部も、青少年たちはだんだんクラブ活動が主になって、お呼びもかからなくなり、次第に気落ちしていった。そのようなことから婦人ボランティアたちは、すばらしい仲間とあたたかい手を生かすため地域へ活動を広げていった。

養護施設「三好学園」での繕い物や老人施設「東郷寮」での話し相手、食事の介助、入浴の手伝い、掃除など、また、カウンセリングの勉強を実践に移そうと「つぼみの会」、「けやきの会」、「あゆみの会」、「たづなの会」、「つくしの会」等の保育のお手伝いやお母さんたちとの交流も始めた。その他、福祉センターと協力して、友愛訪問や朗読奉仕「銀河の会」を始めるなど、積極的に活動を展開した。

二、愛知県緑化センターで抹茶接待の奉仕

一九七六年四月、三宅志ずさんが平戸橋のボランティアたちと緑化センターへ遠足に行った際、お抹茶の道具を持って出かけ、日本庭園でお茶会となった。そこに居合わせた所長さんから一味違うとお褒めの言葉を掛けられたのがきっかけで、早速四月二十九日から抹茶接待が始まった。お菓子、お抹茶の買出しをして、一杯百円で緑化センターを訪れる人たちに楽しんでいただいた。五月三日には五百杯出るなど大変盛況で、忙しければ一層楽しく、夜帰宅すると疲れを覚えるのに、朝にはまた忘れて出かけ、十日間続けた。純益の三万円は三好学園の子供たちに新しい下着やパジャマを買って寄付した。それから十一年間、春と秋、緑化センター日本庭園でのお抹茶サービスは切れることなく続いた。それは全く三宅さんの強い意志と情熱に導かれた平戸橋ボランティアによるものであった。緑化センター来訪者も、年々増え、一日に千杯以上もお抹茶をたてるようになった頃、農林省、林野庁で国土緑化を守り進めるための、緑と水の森林基金が五年計画で発足し、そのキャンペーンのために婦人ボランティア全体でお抹茶サービスを行うことになった。一杯二百円に値上げし、東屋の台所の流しも改造された。一九八

八年から五年間は「緑と水の森林基金」であったが、一九九三年から三年間は「緑の羽根募金」、一九九六年からは「緑の募金」として三百円以上を寄付をされた方にお抹茶サービスをするという趣旨で、二〇一〇年まで続いた。ゴールドデンウィークに行われ、毎年延べ二千人余りの方々に利用いただき、ボランティアは一日約十五人ずつ担当した。一九九八年には寄付の累計が五百万円を超え、緑化推進協議会から表彰を受けた。

三．点字製本

一九七〇年（昭和四十五年）十月からスタートした点字製本は、点訳ボランティアの皆さんが、一生懸命に点訳したものをつぶれないようにページごとに紙をはさみ、糸で綴じて製本をする。一冊ずつ丁寧に心を込めて手作りするため非常に喜ばれた。文章によつては、一冊の本が、六、七冊にもなり、また材料費だけでも、普通の本の倍以上になるため、少しでも安価になるよう、また、盲人の方が読みやすいよう工夫を重ねた。できたものは点字図書館へ寄贈された。メンバーが八十歳を超えても活動が続けられ、長年の努力に対して表彰された。二〇一〇年まで四十年間続いた。

四・二十周年を迎える

婦人ボランテニアたちは、常に勉強と実践を繰り返しながら、その活動の輪を少しずつ広げ、一人ひとりの力は小さくても、みんなの協力で大きくしようとする頑張って、一九八七年に二十周年を迎えた。はじめから関わってきた人たちにとっては、とりわけ感慨深いものがあつた。年表づくりに参加した木場幸代さんは、その時のようすを次のように記している。

「むすび」六十号は二十年目の記念号として、年表をつくって載せることになり私もその編集に加わった。「こんなことまで載せるの！」という声と、「だってね！」という言葉が行き交う。事実、年表の長さは三メートルもの巻き物になった。餅つき、カルタ会、成人式、ひな祭り、羅列してみれば、何の変わりもないありきたりの行事ですが、念願かなって開所したばかりの憩の家の母さんボランテニアが、予算や道具もない憩の家へみんなで持ち寄ってきては催した精一杯の若者への贈り物だった。とにかく、出費を押さえて、ボランテニアの心と労力で、“家”を支えていた。ただ単なる施設の行事内容ではなかったという、その頃のボランテニアの気持ち「だってね、この時は」と抹消を阻む。“心から憩える温かい家”をつくりたいと願う私たちは、まだ成長期の若者たちの体格を見て、健康づくりの一助にと会員が届けてくださる野菜や果物、また隣接の空地を借りて「かあさん農園」を作ったりして、夜の食堂を楽しくした。また、安くおいしい手作りのものを腹一杯食べてもらいたいという気持ちだが、フェス

テイバルの時の味バザーや、野外での行事の炊き出しをする動機になった。だから味バザーの内容も現在とはちよつと違っている。一年目の文化祭のバザーで全員が全力投球をしてマイクロバスを買ったことに自信を得て、二年目には建設資金も底をついて、赤土のままだった庭に樹木を植え、藤棚を作り、芝生を植えた。マイクロバスのお陰でボランティアの送迎もできるようになり、会員は市内全域に広がった。この多くの人の働きを憩の家のみにとどめず、広く地域社会に役立てたいと思うようになり、豊田市内の施設を訪問して回った。ボランティアという名称はまだ耳新しく、活動内容もよく理解されなかつたなかで、三好学園と東郷老人ホームは受け入れてくださり、憩の家の休館日を利用して活動をはじめることになった。三年目には活動資金をつくることを目的に、バザーを計画しがんばった。少ない憩の家の財政の中から「ボランティア育成費」という項目を消して、やつと独立した貴重な一年だった。年表の一行一行が果てしない思い出の泉になって、私の脳裏を駆けめぐる。「もう二十年目を迎えた」という私に、「二十年は俺の辛抱の年月だ」と夫は笑う。おかげ様で、私の人生の拾いものは、何ものにも代え難い大きなものだ。

五・二十周年記念タペストリーの製作

豊田婦人ボランティアの二十周年記念として、会員の合作による六十枚のパッチワークを縫いあわせた手作りの大きなタペストリーがつくられた。その図柄はボランティア活動と共に歩んできた会員手作りによる機関誌「むすび」の創刊号から六十号までの表紙を飾った版画の図柄である。それは豊田寿子会長が心をこめて彫り上げたもので、その

表紙絵一つひとつにはボランティア活動への純粋な思いや願い、会員や関係者への温かい励ましの気持ちが進められている。会員たちは、平戸橋地区の松岡あい子さんの指導のもと、手分けして一枚ずつ心を込めてパッチワークし、その六十枚を縫いあわせて縦二・五四メートル、横二・四六メートルの大きなタペストリーをつくった。製作について最初は不安もあったが、半年かかって見事に完成し、その披露が一九八七年（昭和六十二年）四月二十三日の総会に続いて行われ、出席者たちは、製作中の苦労話、見事に完成したタペストリーを目にした感激などを話し合い、二十年間のボランティア活動の一人ひとりの労をねぎらうとともに新たな意欲を確認しあった。このタペストリーは、まさにボランティア活動の歴史を物語るものであり、見る人それぞれに感動を与えた。

六・光の家の設立

豊田市高町の福祉村に、福寿園、無門学園に続いて光の家が一九八九年に設立され、豊田寿子会長が理事長となった。その数年後、光の家の一角（ポケットパーク）に小さな喫茶店がオープンした。ボランティアはケーキ作りと当日のお手伝いを受け持った。毎月第二水曜日に開かれ、施設の皆さんと交流しながら多くの笑顔を生み出した。

七・ホスピスボランティアはじまる

「ホスピス国際ワークショップ報告会」が一九九六年（平成八年）二月九日、ボランティアの会員四十三人が参加して開かれた。新年早々一月五日から七日まで、神奈川県
のピースハウスホスピスで行われた研修会に、豊田婦人ボランティア協会からただ一人
参加した豊田彬子が、当時まだ耳あたらしい「ホスピス」とは、「末期医療」とはという
視点で判りやすく報告した。

ホスピスの理念は、治癒の見込みのない患者がこの世を去る最後まで、少しでも快適な状態
の中で、患者自身の意志と選択で、人生を最大限に充実させることができるようにホスピスケ
アスタッフが力を合わせて応援することです。

ホスピスケアスタッフには、医師、看護婦、ソーシャルワーカー、チャプレン、ボランティア
アがあげられ、チームを組んで患者のケアにあたります。患者は病気の進行にしたがって、ま
さかという否定に始まり、克服する希望、怒り、苦悩、悲観から、やがて死を受容するまで、
さまざまな心理的経路をたどります。

ですから末期患者に対しては、身体的ケアばかりでなく、精神的ケアが必要になります。患
者のライフワーク、人生でいちばん誇りに思っていること、感謝の気持ち、どのような最後を
持ちたいか、死後の世界についてどう思っているかなどを聞いてあげることが大切で、そばに
いてサポートします。また家族に対しても同様に、精神的ケアをし、患者と家族の死別をサポ

トします。このように患者と家族に対して、身体的、感情的、精神的、社会的、あらゆるすべての側面からケアすることがホスピスなのです。

その中でボランティアの役割は大変大きいものがあります。患者の話し相手、車椅子での散歩の介助、食事の介助などはもとより、ホスピスが企画する行事やパーティーのお手伝い、ホスピス運営のための資金集めのバザーや音楽会、後援会のお手伝いなどがあります。ボランティアは一定期間の講習や訓練を受けなければなりません、たとえ資格があつて、その人がどんなに立派な深い思想をもつていたとしても、それを患者に伝えたいと思つている人はホスピスボランティアとしてはふさわしくありません。なぜならば、ホスピスは患者自身の価値観で生きる場所であつて、死に直面しながら生きている人たちには、自分の話をひたすら聞いてもらつたり、不安な心を黙って共感してもらつたり、人の気配を感じていたいためにだけそばにいてもらうことの方が大切なのです。またボランティアは常にホスピスと地域社会との接点となり、地域社会に対してホスピスへの理解を深めるためにも大切な存在です。

報告に続いて、手作りの国際色あふれるサンドイッチの昼食の後、各々身近な問題として、末期医療について真剣に話し合い、有意義な報告会となつた。この報告会により、多くの若い婦人ボランティアの会員たちは末期医療を理解するとともに耳新しいホスピスボランティアへの関心が高まつた。ホスピス設立準備が始まつていた愛知国際病院で、平成八年（一九九六年）九月よりホスピスボランティアが立ち上がり、一九九九年三月に完成したホスピス病棟で活動が始まり、二十名ほどのボランティアが参加した。

八・ボランティアレストラン「サロン・ド・ムスビ」がオープン

一九九八年（平成十年）十月十三日、ボランティアたちの長年の夢であったボランティアレストラン「サロン・ド・ムスビ」がオープンした。ボランティアの心づくしのお料理を囲みながら、話に花を咲かせ、励ましたり励まされたりして、和やかな交流の場になればという目的で開かれた。このボランティアレストランのオープンを、婦人ボランティアの誰よりも待ち望み、感慨深く迎えたのは豊田寿子名誉会長であった。「むすび」六十六号の表紙を飾ったサンフランシスコのログハウスのレストランの版面に添えられた言葉が印象深い。このころから憩の家でのボランティアレストラン開設の構想をあたため、事あるごとに婦人ボランティアの会員に心のうちを語っていた。それを受けて「サロン・ド・ムスビ」が十年越しにオープンしたのである。

当日は、同じくオープンを心待ちにし、そのために大変尽力された小島鎌次郎元理事、武本理事長、豊田寿子名誉会長も参加した。簡単なオープニングセレモニーの後、参加者五十三名でボランティア心づくしの料理を楽しみながら、和やかに交流した。

以来、毎月ベテラン主婦のボランティアを中心に毎回数人で調理の腕を振るっている。

開催日は、一九九八年（平成十年）十月のオープンから二〇〇〇年三月までは、月一回のペースで価格も五百円の豪華和食メニューが中心であったが、二〇〇〇年六月からは、家庭料理を中心に、毎月第一火曜日から三日間開いている。一日限定三十食で、利用者（ボランティア、職員、関係者を含む）ならだれでも参加でき、当日十時までにチケットを買って予約するシステム。金額は材料費の実費三百円である。そのためボランティアが野菜を作ったり、また、材料の差し入れも大歓迎している。

利用しやすく、おいしいと好評で、心待ちにする利用者も多くなり、二〇〇四年からは、コンビニができたことにより、どこでも買えない二百円とし、週三回ほどをボランティアの誰かが心を込めておふくろの味を提供している。和食、洋食、麺料理やパンを主食にしたメニューなどそれぞれが工夫を凝らし、昼食時になると、午前の活動を終えた人たちが三々五々サロンに集まってきて、心づくしのお料理を囲んで話に花を咲かせている。打ち合わせなどに使う人たちもある。この「サロン・ド・ムスビ」の風景こそが、誰もが描いたアステの姿ではないだろうか。

九・グループ「さくら」外国人と交流しましょう！

一九九九年（平成十一年）十月には外国人と交流するグループができ、二〇〇九年まで活動が続けられた。グループリーダーの森清子さんはご主人の海外転勤に伴って南アフリカに六年間ほど過ごし、現地で大変助けられた経験から、海外から多くの駐在者があるのを知り、このグループを立ち上げた。

勤労青少年たちが憩の家でボランティアたちと楽しい時を過ごしたように、外国からきた人たちにも、故郷を離れて異国に來た寂しさを忘れて楽しいひと時を過ごしてもらえようにとの配慮である。その様子を森さんは、次のように記している。

「おはよう！」「グナイドン（トルコ語）」「ナマステ（インド語）」「サラマット何だっけ？（インドネシア語と日本語）」昨年十一月から、月に一度、アステで、いろんな国の言葉が聞かれるようになったことをご存知ですか？といっても、海外の方たちの努力のたまものか、日本語が多く、そして、各国の共通語としての英語が少し、が現状です。夫の赴任地南アフリカから帰国後の一九九八年七月、南アからの交換社員家族が大林社宅に入ったという事で出かけ、外国人の多いことびっくりしました。その時点で、十三ヶ国五十家族でした。若い家族が多いので、子供を通して日本人のお友達もできやすいし、職場を通してすっかりケアされているとは思いましたが、車なしでは

なかなか思うような行動もできないし、さびしい思いをしている人達も多いのではという思いと、こんなに身近にいるんな国の人たちがいるのに、その方たちと交流して各々の国のことを知るチャンス逃すことはない、そして、少しでも日本のいい思い出を持つてもらえたらと、グループ作りを考えました。

さいわいアステのつばさ号をあいている時に使わせていただけることにOKができましたので、大林社宅での集会に参加させていただき、社宅からの送迎をすべからと呼びかけました。即七、八人の方たちが参加を希望されました。その後すぐアステで活動を始めました。それ以後は、毎回八、十二人くらい、日本に着いて一週間とか、三週間とかという方たちも各々の国の人に誘われ参加されています。毎回お互いの文化を紹介しあう楽しい会が続いています。皆さんとても積極的で、トルコの日もトルコの人たちが翌月はぜひ自分たちでと言ひ、今もインドネシアの方たちが次は自分たちとアピール、日本も負けてはならじと、三月はひなまつり、人形を作りましょうと提案、多数決で人形、四月はお花見と決まりました。「これはそろそろグループに名前を」と言いましたら、ハローフレンズ、さくら、ジャスミン、グループアステ、(七歳のインド人ウイーシュが堂々と手を挙げて提案)などが出て、多数決で「さくら」に決定、ではお花見をと決まった次第。早速鞍ヶ池へトヨタ自動車記念館の見学を兼ねてお花見に出かけました。口伝で次から次へ伝わり毎年恒例行事になりました。

十・豊田ボランティア協会と名称変更

婦人ボランティアに定年退職をされたご主人など男性ボランティアの希望がぼつぼつと増えたため名称変更をし、活動の理念、目的を改めて整理した。

活動の理念

- (一) 身近な地域からよりよい社会を築いていくことを目指して活動します。
- (二) 実践と学びを繰返しながら、自分の身の丈を考え、できる範囲で活動します。
- (三) お互いに尊敬し合い、足りないところを埋めあつて、それぞれの温かい心が十分生かせるよう協力しながら活動します。

活動の目的

- (一) アステにおける諸事業を支え、活動に積極的に参加する。
- (二) 施設、病院などへの定例的な活動を行う。
- (三) 施設、病院、団体などの行事のお手伝いを依頼により行う。
- (四) ボランティアの資質向上のため、会員相互の研修に積極的に参加する。
- (五) 実践的な活動ができない所へは金銭的な支援としてバザーの収益金を寄付する。

活動内容

定例活動としてアステで実施している活動は、アステ事務局としてのサポートおよび受付など、アステ内での作業やボランティアの送迎運転などの活動。

また、団体や個人から依頼される点字製本、大林社宅に在住の外国人の家族との交流（グループさくら）、アステを利用する人達の交流のための昼食づくり（サロン・ド・ムスビ）（パン作り）、コンサート後のケーキ・コーヒー接待、アステ外部での活動として、三好学園・豊田市老人ホーム・福寿園・無門学園・光の家・愛知国際病院ホスピス・病院訪問など。

行事における活動としては、毎年ゴールデンウィークに実施される県緑化センターの日本庭園においての緑の募金寄付者にお抹茶のサービス。アステで行われる「アステ祭」で味バザーとして参加、毎年七月に受け入れているJICA主催の海外青年招聘事業のホームステイ受け入れと交流会・お別れ会など、また福祉村三園合同盆踊り、アステ盆踊りでの味バザーを担当。その他AHIオープンハウス、無門学園、豊田養護学校ではお茶・コーヒーの販売サービスのお手伝い。さらにアステで開催される講演会や交流会などでも昼食を担当。以上、多分野に向けてボランティア活動を展開。

十一・設立三〇周年を迎える

一九八〇年七月から第二代理事長であった寺田清彦氏に代わって、一九九二年六月、アラコ会長の武本道一氏が第三代目理事長に就任した。そして、憩の家は、永年にわたる賛助会社の支援、運営委員会・豊田婦人ボランティア協会の多大な力に支えられて、一九九六年十二月、設立三十周年を迎えた。

三十周年の記念事業として、当時国からの奨励で生涯学習が取り入れられるようになり、講座ではコンピュータおよび健康体操の新設、施設面では開設以来三十年を経て老朽化の激しかった別館と第一体育館の改装、障害者の利便性を図った本館トイレなどの改修が行われた。

また、三十周年を記念して、これからの憩の家の事業内容にふさわしい施設の愛称が公募され、職域、地域の人たちから百五十三の応募があった。応募作品を審議会で検討し、慎重に審査が行われた結果、水野直子さんのネーミングが採用され、「アステ」に決定した。

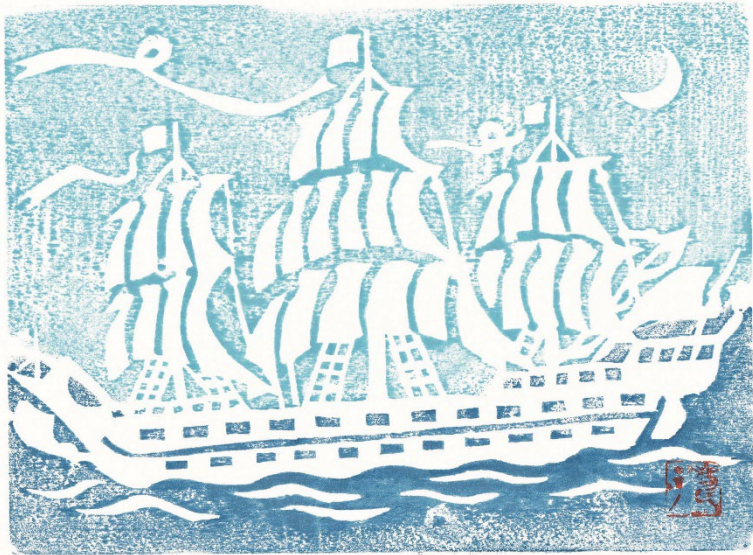
十二 アステの目的・理念の策定

一九九九年五月、尾藤三郎氏が第四代理事長に就任した。時代の変化とともに、憩の家は常にその姿を真摯に見つめ直してきたが、設立十五年目頃からは五年ごとにその在り方が検討され、その時々にかかわった人たちが、それぞれ真剣に考え、知恵を出し合い、助け合い、試行錯誤を重ねながらあたたかい心を育んできた。

二十一世紀を約一年後に控えた一九九九年秋、アステ運営委員会のメンバーの中から「アステ目的・理念検討プロジェクトチーム」を発足させ、一年間にわたり、もう一度原点に戻って検討することになった。具体的には、どのようなニーズで憩の家ができたのか、当時の時代背景や、設立当初の創立者の思いなどを整理することから始まった。その結果、目的を「あすてはみなさんと協力し合い、より良い社会に向けて、思いやりの心を持って、自発的に活動することを目的とする」、理念を「ボランティア精神」とした。また、スローガンを「ア…あいてをおもいやり、ス…すすんでみずから、テ…てとてをむすんで」と設定した。

第五章

未来に向かって





ものづくりなぜ?なぜ?
プロジェクト



とよた日本語学習支援
システム日本語学習



チャレンジアジア
カンボジア



クルマづくり究める
プロジェクト



森のプレゼント

1. 二十一世紀を迎えて With Your Dreams

新たな世紀を迎えた二〇〇一年（平成十三年）十二月。アステの芝生広場に、多角形の瀟洒な洋館風の建物が完成した。メイウインクタスと名付けられたこの施設は、比較的オーブンなアステの施設の中であって、そこだけはまるで別世界のような静けさと落ち着きを湛えていた。

メイウインクタスの名は、当時の職員の名を連ねた架空の惑星の名である。一九九八年（平成十年）に豊田ボランティア協会の新会長に就任し、後にアステ五代目理事長ともなる豊田彬子によって命名された。ちなみにアステの各部屋は、今も惑星や宇宙にちなんだ名で呼ばれている。新しい星を次々生み出す宇宙のような存在でありたい、そんな願いが込められてのことだ。

メイウインクタスが建てられた背景には、多様化する社会問題があった。DVや児童虐待など、家庭内の問題に地域がどう関わって行くのか、一方で個人情報保護など個人の権利が主張され、国際化と少子高齢化が進む中、地域の横のつながりはどんどん希薄になってきている。もはや行政の力だけでそれらの課題を解決することは不可能であり、市民による新たな力が必要とされていた。NPO法施行から三年、豊田市に市民活動センターが誕生したのもこの年だった。

そんな新たな時代に、アステは「With Your Dreams」を事業方針に掲げ、ボラ

ンティアによる、ボランティアの為の施設として再出発を図った。メイウインクタスはそんなアステを象徴する、新たなボランティアの活動拠点でもあった。

メイウインクタスは時に個人の悩みに耳を傾ける場所であり、また時に仲間たちと夢を語らう場所でもあった。それは三十五年前、全国の若者たちを迎え入れ、小さなサロンで青年たちの悩みに耳を傾けた婦人ボランティアの姿そのものであり、また夢を語らう青年たちは、今やそれ以外の世代と故郷を遠く離れた外国人も含むようになっていた。アステはまさに原点に戻ったのだった。

二. アステからあすてへ

二〇〇二年（平成十四年）七月。アステは利用者への情報発信と更なるボランティアへの理解と徹底を目的として、月刊通信「むすび」の発行を開始した。これは一九六八年から一九九六年まで発行された家庭婦人ボランティア通信「むすび」、その後の豊田ボランティア協会通信「むすび」に続くものであった。

二〇〇四年（平成十六年）、第五代目理事長に豊田ボランティア協会会長の豊田彬子が就任し、同年、財団名が正式に「財団法人あすて」に変更された。愛称であった「アステ」からより親しみやすいひらがなの「あすて」に。あすてはまさに生まれ変わった。

この頃からあすでは利用者主体の事業運営を加速させていく。二〇〇〇年以前の利用者は、その大半が講座・講習会の生徒であり、ある意味カルチャーセンター化していた部分があった。その講座・講習会を全廃し、利用者は全て、ボランティアグループの登録者によって構成されることとなった。行事は基本的にグループが主催するもののみとなり、事務局はそのサポートに徹した結果、事業数は大幅に増加することとなる。一方、二〇〇三年（平成十五年）から内外の優れたボランティア活動に対して支援をした「アステ夢大賞」はその後「未来へつながる夢ぷらん」と名を変え、二〇一〇年（平成二十二年）まで実施された。多くの画期的な事業が内外で活発に展開された。

三. ものづくりなぜ？なぜ？プロジェクト

この年、もう一つの大きなプロジェクトが発足した。「ものづくりなぜ？なぜ？プロジェクト」である。このプロジェクトは二〇〇二年に亡くなった豊田寿子さんの遺志を尊重し、ご遺族が豊田市に寄付をされたことに始まる。

このたび、豊田寿子の遺しましたものを青少年のための、ものづくりのプロジェクトにお使いいただきたく、ご寄付させていただく事になりました。ものづくりのプロジェクトは単にものをつくる方法を学ぶのではなく、その心、本質を体験できる場でありたいと願っています。ものづくりの原点は、なぜ？なぜ？と疑問を持

つ事からはじまります。そして知恵を絞り、幾多の苦労や失敗を重ねて、大概のものは多くの人の手を経てつくられます。ハイテクが進み、完成されたものしかなかなかお目にかかれなくなった現代において、実際にもものづくりに関わってきた現場の方々と一緒にやってものをつくることにより、その真剣に取り組む姿勢から、ものづくりの真髄に触れるばかりでなく、生き方をも学ぶ事ができるものと思っています。お互いに協力し、譲り合うことや、失敗を恐れずあきらめないことを学んだり、苦勞すればするほど喜びも大きく、努力すればするほど大きく報われる事を実感したり、物を大切にする習慣、他人を尊敬する事や感謝の気持ちを育くむことができます。そして最終的にはものづくりの楽しさを実感してほしいと思います。それとともに、伝える側の大人たちが、自分達の培ってきた技を伝える喜びと生きがいを感じる場所となるよう願っています。

豊田市はその寄付を基金として実行委員会を立ち上げ、豊田市ゆかりの三つのものづくり「農業」「繊維」「自動車」(後に陶芸チームと造形チームが加わる)をテーマに、子どもたちにもものづくりの技と心を伝える事業を進めることとした。事務局は豊田生涯学習課とあすてが担い、会場はあすてを使うこととなった。農業チームは、一年間かけて米と野菜を育て、繊維チームは綿や蚕を育てそこから糸を紡ぎ、機で布を織る。自動車チームは、四十年前のパブリカを修復し、二年目からは子どもたち自らのデザインによる夢の車づくりも行なった。年間三十五回程度、主に土曜日に活動し、二〇〇四年度に参加した子どもたちの数は一一五名。それを支えるボランティア指導員の数は一三二名を数えた。そんなボランティアの中には、設立時、ボディービルリーダーとして活躍し、憩の家の婦人ボランティアに支えられた大間知健治さんの姿もあった。当時の若い勤労者が定年を

迎え、今度は培ってきた技術でものづくりボランティアとして次代の育成にあたる。そんな姿がいつしかあすてでは見られるようになっていた。ボランティアというバトンは確かに受け継がれているのである。「ものづくり」をテーマにしたボランティア活動は、その後もあすてにとつての重要なキーワードとなっている。

四、地球市民村 in あすて

二〇〇五年（平成十七年）は愛知県で愛・地球博が開催された年として記憶に残る。この国際博覧会のテーマは「自然の叡智」であったが、それを最も具現化したと評価されたのが、万博史上初の本格的な市民参加による公式パビリオン「地球市民村」であった。

万博閉幕後の二〇〇六年（平成十八年）三月。あすてはそんな市民活動の遺産を継承していくため、多くの市民団体やNPO、NGOの協力を得て「地球市民村 in あすて」を開催した。持続可能な自然との共存など、地球規模の様々な課題に対し、体験を通して考える、そんな催しとなった。豊田市の万博閉幕記念事業と連携したこともあり、参加者数約五〇〇〇名。出展団体数四十一、ボランティアも一三〇名程が参加し、新たなあすての力を結集したまさに手づくりのビッグイベントであった。

五. Dreams to the Future

四十周年を迎えた二〇〇六年(平成十八年)度から、あすては「Dreams to the Future」を事業方針とした。これは二〇〇一年度から進めてきた「With Your Dreams」に代わる新しい事業方針として、夢から生まれた様々なボランティア活動を、さらに未来や社会に向け、広く発信していくことを目指していた。

この頃、あすてには五〇のボランティアグループが誕生し、八〇〇名を超す人々がボランティア活動に従事していた。また、新たな事業の柱として ①ものづくりの心を伝える ②よりよい環境を創造する ③人々に元気を与える を掲げ、定年後の熟年層にもものづくりや環境保全の分野で活躍の場を提供するとともに、外国人も日本人とともにボランティアが出来る環境づくりを構築していった。

また、外部団体との連携も積極的に進め、全国ボランティアフェスティバルへの参加を始め、二〇〇七年(平成十九年)度には愛知県で開催された第十一回アジア太平洋地域ボランティア会議(AVE)の運営にも参画した。

六. 4 S 活動

あすては一五〇八〇平方メートルという広大な土地に、本館、ものづくり館（旧別館）、メイウィンクタス、K O ? B A などの施設を備え、多くの木々と草花、芝生広場に囲まれた緑豊かな場所である。そんなあすての美化活動を支えているのは、設立当時からボランティアの力である。その伝統は現在にも受け継がれ、緑化整備の一部を除き業者委託はしていない。館内清掃から草取り、庭木の剪定、柵の修理にいたるまで、あすては利用者自らが進んで役割を担っている。それぞれの特技を活かして、またはグループで協力して、それはまるで自分の家のように、気づいた人が掃除機をかけ窓を拭く。当初 4 S 活動と呼んでいたそれらの美化活動は、現在は「たすき活動」と呼ばれ、あすてのボランティア精神を体現する活動となっている。ちなみにたすき活動とは、「たのしい」「すごししやすい」「きれいな」の頭文字をとった造語である。ボランティアとは楽しむことというあすての精神がここにも反映されている。

七. チャレンジ・アジア カンボジア

タイの教育環境改善を目的に十二年間続いた「チャレンジ・アジア」は、タイの経済成長とともに

に一九九九年、同国での活動に幕を降ろした。その後、ベトナムなど幾つかの国でチャレンジ・アジア再開のための調査も行なわれたが、現地の治安や受入体制の問題などでなかなか実現はしなかった。そんな中、有力な候補地としてあがったのがカンボジアであった。

カンボジアは一九九三年の総選挙で民主政権が誕生するまで、長く内戦状態が続いた国だった。一九七五年に政権を握ったポル・ポト派は、極端な共産主義思想のもと、都市住民や知識層を強制的に農村部へ移住させ、百七十万人もいわれる人々が拷問や処刑、飢餓で亡くなった。長く続いた戦鬪で全土に地雷が埋まり、当初は治安の面からカンボジアでの活動は難しいと思われていた。

しかしそんなカンボジアでの活動の扉を開いたのは、一九八〇年に組織され、あすでも長年協力関係にあったNPO法人「幼い難民を考える会」の存在であった。幼い難民を考える会(以下CYR)は、内戦後のカンボジアで子どもたちが安心して暮らせる環境づくりと女性の自立支援に取り組んでおり、あすではチャレンジ・アジア カンボジアとして、CYRの活動を支援することとなった。メンバーは公募で集まった十名の若者だった。二〇〇八年十二月二十五日から三十一日までの七日間。若者たちはカンボジア・プノンペン近郊の小学校で、机のペンキ塗りやグラウンドの整備、生徒との交流などを行った。帰国後の報告会では、彼らの充実した生の声に接する事ができた。

子どもたちのキラキラの笑顔。このために何が出来るのか。僕ができる事は少ない。だけど僕にできることがある。それは彼らを忘れないこと。初めてのカンボジア。ボランティアという言葉に心を惹かれ、参加を申し込んだ。ボランティアと一言で言っても形は様々である。イベント会場での案内、被災地での復興支援、福祉施設での慰問活動。ただしどんなボランティアにおいても共通しているのは「ボランティアはしてあげるものではなく、させてもらうもの」ということ。カンボジアに向かう飛行機の中で改めてこの言葉を反芻していた。サツカーコートを作る？子どもたちとの交流？一体自分に何ができるのか？まずはカンボジアに行き、子どもたちに会い、この目で確かめてみよう」と一歩を踏み出した。

そんな自分の目に映ったのは、未舗装の道路と裸足の子どもたち。これがカンボジアという国との初めての出会いだった。礼儀。それがカンボジアの子どもの第一印象。教室に入ると子どもたちは立って合掌したまま我々をじつと見ている。おしゃべりをしている子はおらず、みんな礼儀正しい。カンボジアの子供たちはおとなしいのかと思ったが、その考えは後にすぐ訂正する。元氣。これが彼らへの第二印象。カンボジアの子どもたちは楽しみ方がとにかく半端ではない。ちよつとしたことでみんな腹を抱えて大笑い。大きい子も小さい子も一緒になってゲームで大盛り上がり。遊んでいる最中にどこかをぶついたり転んだりしても全然気にしていない。出会いといえどもちろんメンバー十名との出会いもそう。初めて会った時からチームとしての団結力・行動力はすごいものを感じた。メンバー全員がカンボジアについて真剣に感じて、そして悩み考え、行動する。それぞれのメンバーが考えていること、感じていることをシェアできてとても刺激を受けた。

ごく普通の日本人はカンボジアという国についてどんなことを知っているのだろうか。アンコールワット、数え切れないほどの地雷、最近では人気テレビ番組でカンボジアに学校を建てるため有名人が書いた絵画オークションが行われたことを思い出し、貧困やかわいそうな人々と我々日本人はカンボジアにこのようなイメージを持つている。しかしカンボジアは今とても平和だ。確かにほとんどの国民は貧しくギリギリの生活をしており必要な教育や医療は足りず、治安もいいとは言えない。それでも約三十年前のポル・ポト政権やその後のインドシナ戦争の時代からすれば想像できないくらい平和だ。今やつと平和に向かう再生への道を歩き始めたカ

ンボジア。日本人として、また同じアジア人として、そして今回カンボジアを訪れ実際に子どもたちと同じ時間を共有した一人の人間として、我々はどんな責任・義務があるのだろうか。一般の日本人が持つカンボジアについての意識を、曖昧なイメージではなく、現実問題としてクリアな形で伝え、一人でも多くの人にカンボジアの現状を知らせる事が義務ではないだろうか。幸せとは？ ボランティアとは？ 優しさとは？ 平和とは？ チャレンジアアを通していままで感じたことのない様々な想いもたくさん生まれた。たくさん笑って、たくさん色んなことを考えた六日間だった。自分のできることを考え実行もしてみたけれど、もしかしたらそれは子どもたちにとっては迷惑なことだったかもしれないと考えてしまう時もある。でも子どもたちのキラキラした笑顔は本物と信じたい。

今後も自分たちがカンボジアのために何か活動が続けていくにはどのような活動が必要で、どのような活動が余計なお世話なのか、本当によく考えないといけない。物や金という即時的な支援ではなく、自立した暮らしができるための支援をどんな形でやっていけばいいのか、すぐには見つかるとは思えないが、初めて訪れたカンボジアの光景を心に刻み、持続可能な形で取組んでいきたい。

最後に今回このような機会を実施し、素晴らしい貴重な体験をさせてくださったあすて、若い難民を考える会、トロピエンスバイ小学校の皆様、本当にありがとうございます。そして六日間を一緒に過ごした十名のユニークなメンバーとカンボジアにいる全ての子供たちに、心からオーケン(ありがとう)！

チャレンジ・アジア カンボジアはその後も毎年十名程度の若者をカンボジアの地に送り出し、二〇一四年まで続いた。帰国後、彼らは「あカンて」という自主グループを立ち上げ、現在もカンボジア支援の活動を行っている。

八．スマイルプロジェクト

一九九〇年（平成二年）の入管法・入管難民法の改正により、豊田市にも日系ブラジル人を中心に多くの外国人が居住するようになった。しかし文化や言葉の違いから、しばしば地域コミュニティにおいて日本人住民との間にトラブルも発生していた。多文化共生という言葉が使われ出したのもこの頃からであった。

二〇一〇年（平成二十二年）、あすては在住・在勤外国人との共生を目指す新しい事業として、スマイルプロジェクトをスタートさせた。これは二〇〇九年まで続いた外国人との交流ボランティア「さくら」の活動を継承するもので、豊田市が名古屋大学と共同で開発した「とよた日本語学習支援システム」を活用した日本語学習である。「たのしいにほんご」という事業名で週二回の日本語学習を開講させたのに続き、日本文化体験デー、日本文化体験ツアーなどの企画を次々と実行に移した。また同時に、外国人が主体となった文化交流会やダンスイベントなども実施し、日本人が外国人のためという決して一方通行のものだけではない、日本人も外国人も一緒に真の国際交流を目指した。

九、共に築こう 笑顔の世界

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日。新年度を間近に控えたその日。東日本を未曾有の災害が襲った。東日本大震災。マグニチュード9の巨大地震に続き、東日本沿岸部を襲った大津波は無数の尊い命をあつという間に飲み込み、それに続く福島原発の事故は、終わりなき放射能との戦いの始まりとなった。豊かさを享受してきた日本人にとって、その大災害はまさに生き方そのものを見直す転機となり、人と人とのつながり、助け合いなど、ともすると失いかけていた美德について、考え直すきっかけともなった。戦後に次ぐ大きな転換期が、震災後にやってきたとも言える。

二〇一一年度。あすては新しい事業方針として「共に築こう 笑顔の世界」を掲げた。多くの笑顔が失われたこの年に、再び笑顔溢れる世界を、仲間と共に手と手をむすんで築いていこう。図らずもそんな決意の表れともなった。

また、この年、あすてはもう一つの大きな転換点を迎えることとなった。公益財団法人への移行である。これは国の公益法人制度改革により、全ての社団法人・財団法人が一旦特例民法法人となり、その後新たに一般財団法人もしくは公益財団法人の認定を受けなければならないというものだった。もちろん、あすては公益財団法人への道を選んだ。しかしその認定には公益性を示す様々な

審査をクリアする必要があった。それは明治以来の大きな改革であり、誰もが手探りの、まさに難作業であった。前年にプロジェクトチームを発足させたあすては肅々とその作業を進め、ボランティアの公益性を一つ一つ示していった。そして二〇一一年十月三日、公益財団法人あすてとしての出発を果たした。

十. 地球緑化プロジェクト「砂漠化防止のための中国植林活動」

公益財団法人となったあすては、その後も新たな事業を次々と生み出す。多様化する社会課題に的確に対応するためには、登録するボランティアの学びの場が必要と考え、二〇一二年（平成二十四年）にはボランティアカフェを始めた。この事業は、様々な分野で活躍されているボランティア実践者をお招きし、コーヒー片手に気軽に意見交換をするというもので、一回目のゲストには太田稔彦豊田市長をお招きし豊田市の未来について語り合った。その後も二カ月に一回程度の割合で開催され、ボランティアのスキルアップにつながった。

また、この年にはチャレンジアに続くもう一つの大きな国際協力事業が誕生した。あすて地球緑化プロジェクト「砂漠化防止のための中国植林活動」である。始まりは、あすての登録グループの一つで、日本と中国の友好交流を目的に活動していた華豊の友から、中国で深刻化している環

境問題に取り組めないかとの相談だった。中国の環境問題は、中国国内に留まらず、黄砂などで日本にも影響を及ぼしており、国を越えた地球全体の問題と捉えて、微力でも自分たちに来れることを模索した。その結果、中国内モンゴル自治区で、砂漠化が急速に進んでおり、それを食い止めるための植林活動を、現地で長年植林活動に従事している王蒙志氏にご協力いただきながら進めることとなった。現地調査などを経て、二〇一三年（平成二十五年）四月二十五日～二十九日の五日間、中国内モンゴル自治区シリンホト市近郊で一回目の現地植林活動を行った。公募による市民三十名に中国国内から二十名が加わり、まさに日本人と中国人が手を携え汗を流しながら約十万本の黄柳を植えた。王蒙志氏に管理を委託し、あすての森と名付けた土地の広さは約二十万㎡。中国の砂漠化が進む広大な大地の前では本当に小さな抵抗ではあるが、いずれは大きな力となって私たちの住む星を守ることにつながるかもしれない。そんな思いで今日もあすての森では木を植える人がいる。

十一・森のプレゼント

二〇一三年には中国植林と並んでもう一つ、あすてを代表する事業が始動した。森のプレゼントである。豊田市は二〇一五年の大合併によりその面積の実に7割が森林となった。車の街であると同時に森の街にもなったのである。森は豊かな恵みをもたらすと同時に時に私たちの暮らしを脅か

しもする。二〇〇〇年九月に発生した東海豪雨。豊田市は矢作川の決壊であわや市街地が浸水かという危機に直面した。最悪の事態はなんとか回避されたものの、その際浮き彫りとなったのが、矢作川上流域の森の荒廃であった。人の手の入らない山は荒れて木が倒れ、豪雨の際には土砂崩れや流木となって下流の街を襲う。森のプレゼントは、そんな森林の保全を目的に、間伐材を切り出して製材し、木工製品を作って福祉施設等へ寄贈することを内容とし、さらにはその工程全てをボランティアの手で行う事を目標にした。かつて家庭婦人ボランティアと若者たちが集った憩の家旧本館をものづくり館として改修し、設備の多くは廃業する建具店などから安く譲り受けパネルソーなどの大型木工機械も整備。二〇一四年(平成二十六年)にはアメリカから簡易製材機も導入し、地元企業の協賛も得て、ベンチや積み木など多くの木工製品を保育園、児童養護施設などに寄贈した。活動メンバーは約二十名。その多くは企業を定年退職した男性たちであり、その中には憩の家設立当時、故郷を離れてこの豊田市にやってきた元若者の姿もあった。「働く人々に憩いの場を与え、ひいては地域社会に奉仕することを目的とする」。支えられる側だった彼らが時を経て支える側に立ち、地域の笑顔を作り出す。それが、憩の家からバトンを受け継いだあすでの今の姿なのかもしれない。

十二．クルマづくり究めるプロジェクト

二〇〇四年から十年間続いたものづくりなぜ？なぜ？プロジェクトが幕を降ろし、その後継ともいえる新しいプロジェクトが二〇一四年から始まった。クルマづくり究めるプロジェクトである。ものづくりなぜ？なぜ？プロジェクトの「自動車」チームをベースに、より深い自動車づくりを究めるため、「入門」「研究」「挑戦」の三つのコースを設け、公募による小学五年生以上が学ぶこととなった。その資金は、二〇一三年に満百歳で亡くなられたトヨタ自動車の最高顧問・豊田英二さんのご遺族による豊田市への寄附金の一部が活用された。一期生の公募は全チームあわせて七十名程度を予定していた。しかし実際の応募はその定員をはるかに超え、最終的には百九名を受け入れることとなった。それでも抽選から外れ涙する子供たちが何人もいた。当然、会場となるあすてのK O？B Aだけでは手狭となり、翌年には塗装ブースも完備した新たなK O？B Aを新築した。K O？B Aの周りには修復した車や挑戦チームが製作を始めたエコランカーなどの試走が出来るようミニテストコースも設けられ、指導員と呼ばれる自動車関連各社からのボランティアは三百名を超えた。自動車づくりに特化したこのような活動は全国でも、いや、世界でも類がないのではないかと思われ、まさに豊田市が誇るべき事業であると言える。活動前の朝礼では、毎回、全員でラジ

才体操が行われ、その後、次の心得が指さし呼称される。「①大きな声で元気よくあいさつしよう。

②指導員やボランティアの注意をしつかり守ろう。③いつもなぜ？なぜ？の意識を持って行動しよう。④目標達成に向けてみんなで協力しよう。⑤失敗をおそれず前向きに挑戦しよう。」

十三、次代を見据えて 「行動しよう！ 笑顔のために」

あすては常に社会情勢に鑑み、時代のニーズを的確に捉えて事業に反映させようと努力している。ボランティアカフェやチャリティー十日市、日本文化体験などの事業もその例であるが、災害などへも即座にできる方法で動こうという態勢でいる。微力ではあるが柔軟に対応できるところがある。この利点である。そして今、若者の町と呼ばれた豊田市にも、急速な超高齢化と人口減少という、まだ経験していない社会への足音が確実に聞こえ始めている。新たな地域づくりへの挑戦が始まったともいえる。

設立から五十年目となる二〇一六年(平成二十八年)を前にして、次の時代を見据えた新しい事業方針の検討を行い、「あいてをおもいやり すすんでみずから てとてをむすんで」のボランティア精神を基本理念として、「行動しよう！笑顔のために」-----「地域を笑顔に」「世界を笑顔に」「未来を笑顔に」を中期目標に掲げ、7つの事業テーマ(いかす、つながる、よりそう、ささえる、

まじわる、そだてる、いどむを策定した。笑顔あふれる社会の実現のために、ボランティアが一丸となつてそれぞれが出来ることでもっと積極的に行動しようというあすでの決意表明でもあった。

この新しい事業方針のもと、二〇一六年度には多くの事業が具現化された。地域の高齢者についてまでも元気で活躍してもらいたいとボランティアの出来ることで迎え入れる「いきいきタイム」。子育て中のママが孤立しないよう仲間づくりを後押しする「すくすくママ」。外国人に豊田市の多彩な魅力を知ってもらうため公共交通機関を利用しての「いいところ発見ツアー」。また、この年から二ヶ月に一回程度の割合でテーマの異なるフェスタも開催された。七月には国際協力フェスタ。九月にはものづくりフェスタ。十一月にはエコファミリーフェスタ。また「すくすくママ」から「ありのママフェスタ」も誕生し、どのフェスタも多くの出店者と来場者で賑った。十二月の設立記念日には「スマイルフェスタ」。その他、からくりをテーマにしたフェスタ「からくりピックアップ」開催に向けて、「からくりエイト大賞」を設け、全国から斬新な発想のからくり作品の募集も行う。まさに五十周年を機に新たな事業の花が咲き誇った感じである。

そして何よりも二〇一六年度の事業の中心には、あすてが五十周年の記念事業の一つとして取組んだ木製初代カローラの姿がある。あすてが歩んできた五十年の歴史が、そこに象徴されている。

あすて設立五十周年にあたり、賛助企業はじめ多くの関係者の皆様方からこれまでに賜りました数々のご支援に対しまして、心より厚く御礼申し上げます。間伐材カローラが先日完成致しました。これはあすてが五十年を記念して森林保護のために間伐が必要であり、その間伐をした木材を有効利用することの大切さを皆さんに知っていただきたい、そこにカローラがちょうど五十年を迎えるということで企画したプロジェクトです。あすてとカローラが共に五十年、これは決して偶然ではありません。あすてが誕生した五十年前は日本が高度成長時代でありました。カローラなどの大衆車が開発され、そのために次々と工場が建設され、全国から若い勤労者たちが集まってきました。ちょうど豊田市も合併を重ねて大きくなっていった時代です。その高度成長時代を支えてきた若い勤労者たちは、遠く故郷を離れて働く中で、さびしい思いをしたり、いろいろ悩んだり、そのような時に母親の如く相談ののったり、繕い物をしたり、おなかをすかしていればラーメンを作つてあげたりして関わってきたのがボランティアの始まりです。やがてこの地域を背負って生きていく若い人たちが健やかに育つてほしい、できれば社会のために尽くせる人になってほしいという願いをもって、彼らの憩いの場として設立されたのがあすての前身である勤労センター憩の家です。当時アイシンの社長であった渡部新八さん、県会議員の酒井鈴夫さん、ルーテル教会の緒方牧師、高岡地区婦人会のお母さんたち、この4者の固く結ばれた熱い思いは、五十年を経た現在もボランティアの心の拠り所として脈々と受け継がれています。当初は渡部氏のポケットマネーで運営されていましたが、すぐにトヨタやアイシン、豊田鉄工会が中心となつて運営委員会組織ができ、賛助が始まりました。今でも連綿と受け継がれているこの賛助企業の組織なしにはあすては続かなかつたと思うほど大きな存在です。本当に感謝に堪えません。賛助金はまさに従業員への結晶が集まったものです。そして、その従業員やリタイヤされた方、五十年前に若い勤労者として豊田市中いらした方々が今あすてのボランティアとして活動してくださっています。賛助企業があすてに向けてくださる尊い浄財や、応援してくださる様々な団体、関係者の皆様からの賜物にお応えするためにも、あすてに集うボランティアたちの織り成す活動に、先人たちの築いた熱い思いを乗せて、これからも今までに増して地域へ、世界へ、未来へと笑顔を広げていくことをお約束申し上げて感謝の言葉に代えさせていただきます。

(設立五〇周年記念誌より)

十四 新たな力

五十一年目を迎えた二〇一七年（平成二十九年）の秋のある日。豊田市山間部、小原の山の中に一人の男の姿があった。森林ボランティアが倒した杉の木を、トビという丸太を移動させる道具を使って黙々とトラックに運び込む彼の名はアリエル。配偶者の駐在にともなって豊田市にやってきたブラジル人である。三年ほどの滞在期間、日本でなにかをやりとげたいと考えた彼は、あすてボランティアグループ森のプレゼントの一員となり、連日ボランティア活動に汗を流した。さらにアーティストでもある彼は、同じく豊田市に住むほかのブラジル人と協力してあすてで子ども向けのワークショップを開催し、たくさんの親子の笑顔を生み出した。

あすてにはこうした外国人が他にもたくさんいて、共通するのは、豊田市に住む外国人として、自分たちのために何かをやってもらうのではなく、むしろ自らも市民の一員として、地域社会のために役に立ちたいと行動する姿であった。一九九九年に始まった「さくら」グループの活動がそうであったように、あすての考える国際協力、多文化共生とは、まさにそうした姿であった。

十五 お祭りムードの中で

平成から令和の世へと変わった二〇一九年（平成三十一年。同年五月より令和元年）。豊田市で国際的なビッグイベントが開催された。ラグビーワールドカップである。オリンピックやサッカーワールドカップと並ぶ世界三大スポーツ大会の一つが日本で開催され、全国十二の会場の一つに豊田スタジアムが選ばれ、三試合が開催（最終戦は台風で中止）されたのである。会期中、国内外から十一万人が豊田市を訪れた。駅前を中心に様々な関連イベントが連日開催され、国際色豊かな雰囲気の中で街は大いに賑わった。この頃の豊田市、いや日本は、翌年に東京オリンピックを控えていたこともあり、ある種のお祭りムードにあつたようにも感じる。人と人がふれあい、同じ空間で喜びを共有する、そんな日常が当たり前に存在していた。

一方であすては、設立五十五周年に向け大きな変革を計画していた。老朽化した施設の建替えと、イベント中心の事業運営からの転換である。不特定多数を対象とした一過性のイベントではなく、少人数でも志の高い、持続可能な事業を発信するにはどうしたらいいのか？ あすてが果たすべき新たな時代の役割について議論を始めたその頃、中国武漢市で原因不明のウイルス性肺炎が発生したとのニュースが流れた。しかしその時はまだ明日も変わらぬ日常がやってくるものと信じていた。

十六、新型コロナウイルスの流行

二〇二〇年（令和二年）一月一日。日本で初めての新型コロナウイルス感染症患者が確認された。2月にはクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で集団感染が起き、大規模イベントの中止や延期、学校の臨時休校などが決まった。3月には新型インフルエンザ等対策特別措置法が改正され、緊急事態宣言の発出も可能となった。しかしこの時点でもまだ、多くの人は少しの間我慢すればこの禍は過ぎ去るだろうと信じていたように思う。4月16日、全国に緊急事態宣言が発出。不要不急の外出は制限され、多くの企業がリモートワークに切り替えた。ソーシャルディスタンスという言葉が一般的となり、人々は日常的にマスクを装着し、互いの距離を離すことを求められた。それは今まで当たり前だった社会生活が、根本から変えられる事態でもあった。

この年、5年ごとに掲げる中期計画の最終年度を迎えていたあすでも、予定されていた事業の中止や見直しを余儀なくされ、感染拡大防止対策に迫られた。ソーシャルディスタンスは、ある意味、人と人の心をむすぶボランティア活動においては真逆の行動を求められるものであった。しかし、対策を講じつつ、あすてはボランティア活動をとめることは決してしないという信念のもと、グループ活動についてもその門を閉ざすことはしなかった。むしろ、こういう時代になったのなら、そ

れにあわせた新しいボランティア活動の在り方を模索してみようと、利用者とともに試行錯誤を重ねた。正直、この正体の分からぬウイルスに対し、正しい答えは誰も持っていなかったように思う。しかし、この経験によって、私たちは改めて、人は、人と人のつながりによって、豊かな人生を生き、社会が成り立つということに気づかされた気がする。あすてが大切にしてきた想いは、まさにそこにあるのだと再認識させてくれた気がするのである。

十七. 心をつむぐ あしたを織る

二〇二一年度（令和三年度）。あすては新たな事業方針として、「心をつむぐ あしたを織る」を掲げ、5年間の中期計画をスタートさせた。事業方針には、ひとつひとつのボランティアの力は、細く弱いものかもしれないけれど、それを撚りあわせ、丈夫な糸にして、みんなで笑顔あふれる明日という布を織りあげていこうという想いを込めた。また、二〇三〇年をゴールとしている、SDGsの理念「誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現」もまた、あすての事業やグループ活動の指針になると考え、あすての取り組みの全てを9つのプロジェクト（「手っ巧」「グリーン」「チャリティー」「わた雲」「惑星」「ひと」「どこでもあすて」「新施設建設」「効率化」）に仕分けし、それぞれをSDGsの目標とリンクさせた。こうしてボランティアの心が一つになって前へ進めること

が、今こそ大事だと考えたのである。依然として、新型コロナウイルスが社会から消えることはなかったが、だからこそ「できない」ではなく「できる」ために知恵を絞り挑戦を続けることを、改めてあすでは実行していこうと決意したのである。ボランティアグループ内の結束がさらに深まった感じを受けるのもこのころからである。まさに禍を転じて福と為すということでしょうか。

そんな挑戦の一つが、走る木製カローラだった。五〇周年で製作した原寸大の木製初代カローラ。役割を終えてお蔵入りしていたそのカローラを、今度はものづくりボランティアの手によって水素を使って走る車に改造しようと試みたのである。当初は、豊田市のものづくりミライ塾で開発し、特許も取得した水素発生装置を活用し、100%水素による発電での走行を目指したが、技術的課題も多く、最終的には大半を充電したバッテリーで走る電気自動車となってひとまず完成させた。100%水素による燃料電池車への改造の夢は、実はその後も続くこととなるのだが、あすて設立五十五周年を祝う十二月十一日。あすてのKOB A前には、改造に関わった多くのものづくりボランティアと関係者に見守られ、ゆっくり走る木製カローラの姿があった。全員マスクを着用している姿は、まさに、この時代を彷彿とさせるものであった。

十八：新たな拠点とともに

二〇二二年（令和四年）はあすてにとって大きな出来事があった。新本館が完成したのである。設立から五十年以上が経ち、各施設の老朽化が進んでいた。一九七四年に新館として建てられた本館にも、屋根や壁面に大規模な修繕が必要な箇所が次々と見つかり、多額の費用がかかることが判明した。また、高い天井を持つ斬新な建物の本館は一方で冷暖房を使用するには非効率な設計となっており、グループが利用する活動部屋についても、ものづくりに対応した造りになっていないなど活動の実態との乖離がみられるようになっていた。

こうして二〇一九年頃から施設の将来について、ボランティアやスタッフの間で夢を語り合う機会が設けられた。何回かの話し合いを経て建設の方向で方針が固まったが、その中で大切にされたのは、あすて設立時の先人たちの想いに表される理念と目的であった。二〇二〇年には臨時の理事会と評議員会が開催され、新施設の自己資金での建設が承認された。工事は数年間に渡るため、その期間もあすての事業やグループ活動がとまらないよう、先ずは東屋を解体しその跡地に木工の拠点を建設。その後、設立時の本館でもあったものづくり館を解体してその跡地に新たな本館を建設。現本館解体後、その跡地を整備して金工の拠点を建設するという流れになった。

新本館は、従来の本館より一〇〇メートルほど北へ移動した、設立時の本館のあった位置に建てられた。屋根から壁、さらには内壁までが深い緑色の屋根材に覆われ、訪れた人はみなその斬新なデザインに驚いた。しかし小高い丘の頂に建つその姿は、遠望すると自然と調和したシンプルな佇まいでもあり、東側に設けられた広いウッドデッキからは、眼下に田園風景の中を走り抜ける名鉄三河線の赤い電車。その向こうに三河高原の山々、はるか遠くには中央アルプスと恵那山、さらに北を望むと御岳山と設立当時から変わらぬ景色が広がっていた。ただし、青年ボランティアの手によって植えられ、毎年多くの人が開花を楽しみにしていた二十本を超えるソメイヨシノの大木は、老朽化が進み倒木の怖れもあつたため、その大半が伐採され、ものづくり館前に広がっていた芝生広場も駐車場へと姿を変えた。これらは、一つには毎年重くのしかかっていた環境維持費の経費削減のためでもあつた。メイウインクタスと第1・3KOB A以外の建物は全てが新しくなり、かつてのあすて設立時の面影はほぼなくなつたと言つてもいい。しかしそれはまさに百年に一度の大変革期といわれる時代の波にあすても少なからず影響を受けているのかもしれない。

十九. ものづくりを通して

この頃、あすては施設の建て替えとともに、もう一つの大きな変革を行った。ものづくりを基軸とした事業への再編である。全国からやってきた若い勤労者の憩の家として出発したあすての設立時の願いは、昼夜を問わず彼らのために汗を流して奉仕している婦人ボランティアたちの後ろ姿を見ている若者たちが、いずれはボランティア精神をもって、地域のためになる人材に育つことであった。設立から50年以上が経ち、こうした願いをまさに実現する時が来ていた。

若い勤労者の多くは、自動車関連の製造業の現場で働き、かけがえのない技を身に付けていた。こうした技を活用し、ものづくりの視点で社会貢献を進めることこそ、次のあすての使命だと考え、二〇二三年（令和五年）に、県の変更認定を受けて、公益1〜3の事業を全て、ものづくりを通して実施することを決めた。事業の大項目として、公益1の事業目的を「地域を笑顔に」、公益2を「世界を笑顔に」、公益3を「未来を笑顔に」、公益4を「現在を笑顔に」とし、中項目としてそれぞれ「いかす」「たかめる」「つたえる」「むすぶ」「ささえる」「よりそう」「ひろめる」を掲げて各事業を具現化させることとした。もつとも、ものづくりは、実は設立時からずっとあすての事業の中心にあった。ものづくりはひとつづくりという言葉があるように、あすては常に、ものづくりを通

して、ひとと社会を育む活動を続けてきたのである。

二〇二四年（令和六年）。建て替え工事の仕上げとして、旧本館跡地に金K O B AとC o l l i n a N a t u r a l e（コリーナナチュラル）がオープンした。金K O B Aは金属加工のできる施設として整備され、4月20日には、竣工記念として、トヨタ自動車エグゼクティブフェローの河合満氏をお招きし、「ものづくりは未来をつくる」と題した講演会を開催した。また、C o l l i n a N a t u r a l eは、旧本館跡地一帯を地域に開放し、身近な自然に親しみ交流の生まれる公園にするべく、あえて完成させず、これからボランティアの手で少しずつ創り上げていく空間とした。

またこの年、十年間続いた「クルマづくり究めるプロジェクト」が終了し、「ものづくりなぜ？なぜ？プロジェクト」からの三シリーズ目の事業として、「丘K O B Aプロジェクト」がスタートした。これはプロの技能技術者と青少年がワンチームとなって、二年間をかけて未来のモビリティを創造するという豊田市との協働事業で、初年度は四つのチームが誕生し、「近距離イージーモビリティ」「ソーラーカー」「救急搬送モビリティ」「旧車とエコの融合モビリティ」の製作をはじめた。あすてでは他にも「未来学校」がスタートし、未来を担うものづくり人材の育成にも乗り出した。

二十、笑顔あふれる社会のために

二〇二五年（令和七年）。金K O B Aに、木製カローラの改造に取り組むボランティアの姿があった。一度は断念した100%水素で走る燃料電池車への挑戦が再び始まったのである。

また、同じくこの年から始まったプロジェクトに、アジアサイクルプロジェクトがある。これは、日本国内で使われなくなった自転車をボランティアの手によって修復し、カンボジアの経済的な理由で学校に通う手段がない子どもたちに寄贈しようという事業である。新しいものを贈るのではなく、ものを大切にすることを心や、人の手から手へと想いが受け継がれるあたたかなぬくもりも一緒に贈ること、それがこのプロジェクトに込めたあすでの想いである。

このように、あすでが考えるものづくりとは単にものをつくることではなく、そこに心を込めること、さらには、手で作ることをなによりも大切にしてきた。それはあすでのシンボルマークであるむすびにも象徴されている。手で作るものはなにも形あるものだけではない。時には誰かの幸せであったり、誰かを癒す音色であったりもする。なにをつくるのか、それはひとそれぞれである。しかし、共通するのは、そうしてつくりだしたものが、誰かの笑顔になっているということである。あすではこれからも「つくる」ことを大切にするとともに歩み続けたいと思っている。

二十一・笑顔の松明を 広く遠く高く

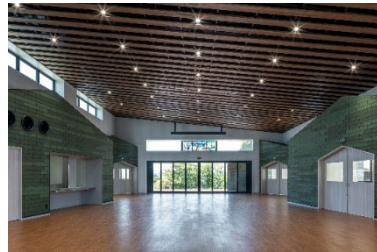
世界はまさに先の見えない混沌の時代を迎えつつある。国連で採択され、豊田市も積極的に企業はじめいろいろな団体を巻き込んで取り組んでいるSDGsもいよいよ二〇三〇年にゴールを迎える。あすでもボランティアとともに二〇二一年からSDGsに取り組んできたが、これからの五年間はさらにゴールを目指して、ボランティアとともに進めて行きたいと思っている。当初の十七のゴールに加えて豊田市独自のローカルゴールもこのほど加わりさらに身近になってきた。

そしてまた、このような混沌とした時代だからこそ、あすでは闇夜を照らす松明の灯でありたいと願っている。そんな願いを込めて、あすでは二〇二六年度（令和八年度）からの新たな事業方針を「笑顔の松明を 広く遠く高く」に決めた。河合満氏からお話いただいた「ものづくりは未来をつくる」のお言葉通り、こつこつと小さな改善を積み重ねること、あすでの活動がもつと地域に広がり、遠く世界の果てまで、そして果てしない未来までも届くように、志を高く持って、ボランティア一人一人が灯す細い灯りを束ねて照らしていきたいと考えている。カロラ量の産産が始まって六〇年、あすでも二〇二六年（令和八年）に六〇周年を迎える。設立以来の変わらぬ想いを抱きつつ、あすでは再び、次の時代に向けた新しい挑戦の一步を踏み出そうとしているのである。

上空からのあすて全景



新本館外観



新本館内部

あすて
全景



正門側から望む

